

第54回

岡山県学校図書館研究大会

真庭大会

大会テーマ

豊かな心と主体的に学ぶ力を育む学校図書館



令和3年8月20日（金）

勝山文化センター

真庭市立中央図書館

岡山県学校図書館協議会

## 目 次

あいさつ	1
開催要項	2
講 演	3
分科会一覧	8
分科会発表・指導助言	
【分科会 A】	9
【分科会 B】	17
【分科会 C】	27
【分科会 D】	39
大会役員一覧	45

## ごあいさつ

岡山県学校図書館協議会  
会長 鳥越 信行

皆様方におかれましては、平素より学校図書館の魅力増進や児童・生徒の読書活動の推進等にご尽力いただき大変感謝申し上げます。岡山県学校図書館協議会は、大会テーマ「豊かな心と主体的に学ぶ力を育む学校図書館」のもと、第54回岡山県学校図書館研究大会の開催のため準備を進めてまいりました。本研究大会は、8月20日（金）に勝山文化センター、真庭市立中央図書館を会場に予定されていましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、誌上発表とさせていただくことにしました。

さて、今、私たちが生きている時代は、AI時代、人生100年時代、VUCA時代、Society5.0などとさまざまに表現され、超加速度的に変化する時代であるといわれています。さらに、新型コロナウイルス感染症のパンデミックをきっかけに、世界は今、大きく変わろうとしています。パンデミックの発生前と発生後では、さまざまな常識が一変します。ポストコロナの世界は、時代の節目に訪れる転換期であり、今までとは違う基準を持った新しい世界観である「ニューノーマル（新たな日常）」へ移行するともいわれています。

将来は変化の連続で、予測が困難だからこそ、子どもたちは変化の底にある本質をとらえ、変化に対応しうる力を備える必要があります。常に考え、学び続ける。その繰り返しが人を成長させ、自分で考え、課題を解決できる力が身につく、これからの社会を生き抜くことができます。

そうした学びを進めるうえで、核となる存在が学校図書館ではないでしょうか。素敵な学校図書館やそこにあるさまざまな書籍や情報は、子どもたちの豊かな心を育み、主体的な学びを支えてくれます。学校図書館は、激動の社会で子どもたちが未来を拓き、生きる力を身につけていくうえで重要な役割を担っています。

ここで、学校図書館がもつ役割や使命を再確認し、豊かな心を育む学校図書館の在り方、「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館の在り方などについて、4つの分科会からの研究発表を通して、研修を深めることの意義は誠に大きいものがあります。この研修を通し、小中高の情報共有や相互の連携体制がより進展し、学校図書館が子どもたちの未来を拓く学びのキーステーションとなればと考えています。

最後になりましたが、岡山県教育委員会をはじめ、ご支援とご協力を賜りました多くの皆様に厚く御礼を申し上げましてごあいさつといたします。

## 開催要項

- 1 期 日 令和3年8月20日（金）
- 2 会 場 勝山文化センター 真庭市立中央図書館
- 3 主 催 岡山県学校図書館協議会
- 4 共 催 岡山県小学校教育研究会 岡山県中学校教育研究会  
岡山県高等学校教育研究会 津山教育事務所管内図書館協議会  
美作地区高等学校図書館協議会 真庭市教育委員会
- 5 後 援 岡山県教育委員会 岡山県市町村教育委員会連絡協議会  
岡山県読書推進運動協議会 全国学校図書館協議会
- 6 大会テーマ 『豊かな心と主体的に学ぶ力を育む学校図書館』
- 7 趣 旨

新学習指導要領にも示されているように、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間力」を3本柱に学校現場で育成すべき力は多岐にわたっている。そのために、学校の「知の拠点」である学校図書館が果たす役割は大きく、司書教諭と学校司書の協働による学校図書館の充実とともに、蔵書や資料の充実も必要である。

子ども達に有益な図書や学校図書館の存在が、幼児・児童・生徒の心を育むこと、これからの時代に求められる主体的な学びを支えることに大きく貢献すること、すなわち子ども達が未来を切り拓き、生きる力を身につけていく上で重要な役割と位置を占めていることは、今までもこれからも変わりはない。

本大会では、こうした学校図書館がもつ役割や使命を再確認し、幼児・児童・生徒の豊かな感性や情操を育む学校図書館の在り方、自ら課題を見つけ、主体的に探究し、学びを深めていく「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館の在り方等について、4つの分科会で発表される研究発表を通して研修を深め、学校図書館のさらなる充実をめざしていきたい。

## 8 講 演

演 題 『これからの時代に求められる学校図書館の役割』

講 師 ノートルダム清心女子大学人間生活学部学科長・教授 湯澤 美紀 先生

# 講演

演題 『これからの時代に求められる学校図書館の役割』

講師 ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科長・教授 湯澤 美紀 先生

- 経歴：広島大学附属幼年教育研究施設助手，日本学術振興会特別研究員（京都大学・英国 Durham 大学）を経て現職。博士（心理学）
- 専門：発達心理学・保育学
- 資格：臨床発達心理士-sv，特別支援教育士-sv，公認心理師
- 読書に関する社会的活動：岡山県子ども読書活動推進会議委員（2014 年—2018 年、2021 年—）・岡山県立図書館協議会委員（2020 年—）・岡山子どもの本の会事務局他

時代の変化とともに学校図書館に求められる役割は大きく変わる。今年（平成 29 年）に策定された国の第五次「学校図書館図書整備等 5 か年計画」の最終年度にあたる。ただし、発表当時、誰一人として、世界全体がコロナ禍に見舞われることなど予想だにしていなかった。そして現在、令和 2 年 5 月に非常事態宣言が発出されてから一年を経て、新しい生活様式の中に私たちはいる。GIGA スクール構想も一気に進み、デジタル化の波は学校図書館にも及んでいる。

時代の転換点において、改めて子どもにとっての学校図書館、そして、学校司書（・司書教諭）の役割について考えていきたい。

## 1 第五次「学校図書館図書整備等 5 か年計画」は、何を提案していたか

同計画で提示された役割は、主に、児童生徒の読書活動や児童生徒への読書指導の場である「読書センター」、児童生徒の学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、児童生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」である。それに伴い地方財政措置は、（1）学校図書館図書整備に 220 億、（2）学校図書館への新聞配備に 30 億、（3）学校司書の配置に 220 億（各単年）が計画された。特に司書教諭及び学校司書の配置充実やその資質能力の向上に対する予算が学校図書館の整備と同額に設定されている点は、本と子どもを繋ぐ校内の専門家の重要性を明確に示している。

## 2 学校図書館に加わった新たなミッション

当然ながら、学校図書館は、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成すること」[学校図書館法第二条]に資する機能を有する。したがって、学校図書館もまた、教育要領の改定に伴い、子どもの学びを支えるための、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点からの学び）を支えることとなる。

同時に、文部科学省が発表した GIGA スクール構想は前倒しで実施され、現在、児童生徒が一人一台の PC を学校で保有することとなった。また、インクルーシブ教育の実現に向け、様々な学習上のニーズを抱えた児童生徒に対する合理的配慮として、ユニバーサルデザインを取り入れたデジタル教材の整備も必要となってくる。

つまり、現代の学校図書館は、児童生徒一人ひとりが主体的・対話的で深い学びへと向かううえ

で、デジタル教材を含む多様な資料を活用できる場となることが新たな役割として加わった。

### 3 紙の本とデジタルの本の違いを踏まえた読書支援

ただし、デジタル教材等の資料の整備といった新たな役割について考える際には、紙の本とデジタルの本が子どもの読書行動にどういった違いを生み出すのか、といった点を踏まえておく必要がある。

この点について、読み書き障害（ディスレクシア）の研究者メアリアン・ウルフが科学的見地を踏まえ、次のように概要をまとめている<sup>1)</sup>。

つまり、情報を得るといって両者は類似しているものの、記憶や注意の維持は、紙の本が優るといってのことである。このことは、改めて本を読むという行為が、五感を用いた体験活動であることを私たちに気づかせる。

例えば、材質に関して言えば、本を手を持った厚みと質感、そして本ごとに異なる重さを感じながら、紙といった素材を手でページをめくる触感、本全体を通した位置の把握など紙の本ならではの体験がそこにはある。人と人とを繋ぐ働きに関して言えば、手軽に人から人へと手渡しやすく、一冊の本を複数の子どもが頭をつきあわせてのぞき込むといった場を自然と創出しやすい。読み聞かせ場面において、人の声に耳を傾ける体験は、音声の読み上げ機能に置き換えることはできない。特に低学年の児童にとって、本を介した人との関わりは、成長に寄与する。本の貸し出しに関して、時間・物理的コストはかかるものの、本棚の前に立ち、関心のある本の隣に並ぶ本から「これぞ」という本を探し出し、新たな知の扉が開く場合もある。したがって、教養を広め、深めるといった中高生にとっても、学校図書館内に身をおき、本棚に並んだ本を眺めるといった時間と行為そのものが、個人の教養を広げるきっかけとなる。これまで何人もの手にわたってきたことを思わせる一冊の紙の本との出会いが、児童生徒の深い読みを導き、人格形成に貢献しうることを忘れてはならない。

しかしながら、これがすなわちデジタル教材を否定するものではない。事実、デジタル教材が優れている面も多い。例えば、児童生徒が文字の読みに困難さがある場合、情報を得るには読み上げ機能が役に立つし、白地の背景に黒の文字のコントラストが文字の読みとりを困難にする場合など、支援教材として最適化されたものであれば背景や文字色を変えることもできる。電子書籍は、コロナ禍において大学生が大いに活用している。紙の本の貸し出しに比べ、時間・物理的コスト（輸送も含め）は大幅に削減され、関心領域の知識を一気に集約するには手軽である。これは、児童生徒にとっても同様の利便性をもたらす。デジタル化が進む一方で、紙ならではの読書体験の良さを再確認するとともに、目的に応じた図書の整備が必要となる。

### 4 子どもの人格形成に貢献する場としての学校図書館と人としての学校司書

第五次計画では、学校司書の配置にかかる予算は第4次計画時の予算に比べ、1.46倍に増大した。そのことは、教育の本来の目的である児童生徒の人格の形成において、学校図書館における学校司書が大いにかかわることを意味する。

研究や仕事柄、学校園に訪問させていただく機会が多い。その際、つい目が向くのは、学校図書館にいる児童生徒の姿である。

ある授業時間、そこに一人の小学校中学年男児がいた。時々、授業中にそこで時間を過ごし、気持ちを整えてまた教室に戻っていくのだと聞いた。背中越しに、彼が読んでいた本のページをそっとのぞいてみた。冒険物語であった。本に鼻先をつっこんで、私の存在にも気づかず文字を追う真剣なまなざしと、さらにその先へとページを急いでめくる指の動きは、彼の心はその物語の世界を駆け巡っていることを思わせた。同時に、その時間、教師は彼にいち早く教室に戻ってきて欲しいと願っていることも容易に推察できた。

校長室に戻り、彼がその本を一心不乱に読んでいた様子を伝えると、校長先生はにこやかに応じ

られた。そして、学校図書館が彼の居場所となっていること、そして、学校司書もまた、彼を含め一人ひとりの成長を支える「チーム学校」の大切な一員であるべきだと力強く語ってくださった。

先の子どもについても、「授業を抜け出してきた」とレッテルをはるのではなく、その時間に学校図書館にやってきたという事実のみを受けとめ、「何に関心があるのかしら」といったあたたかなまなざしで見守ることで、彼についての新たな理解が生み出されると期待できる。また、そこで読んでいた本など、あとからそっと教師に伝えることで、彼と教師が繋がるきっかけにもなり得る。

ただし、そうした関わりは、そこに学校司書がいるだけでは実現しない。学校長が、学校図書館ならびに学校司書の意味を十分認識し、それを校内で共有すること、加えて、学校司書の研修として、日々行われている読書推進の好事例の共有に加え、目の前の子ども姿から今日的な学校司書の役割を議論する研修の場が必要となる。

## 5 発達にふさわしい選書

当然ながら、学校司書は配属の学校の全ての学年の児童生徒の読書支援に携わる。子どもに本を手渡す専門家である以上、子どもの専門家であってほしいとも思う。その際、発達心理学的知見は有用であると考え。ただし、子どもの姿は時代に応じてかわる。その点も踏まえて子どもの発達について概要をまとめる。

小学校入学直後、発達特性とは別に、人の声に関心を向けにくい子どもの存在についてしばしば耳にする。言葉の発達に関して、子どもは胎児期から言語環境に触れており、出生直後すでに母語（第一養育者の第一言語）への感性も高い。特に、母親の声のする方に顔を向け、あたかも懸命に声を聴こうとする。また、喉をならすようなクーイングといわれる前言語を発し、周囲の大人達からの声かけをさらに誘導しようとする。それほどまでに、大人の声に貪欲であった子どもたちに何が起きているのであろうか。

2017年に実施されたNHKによるテレビ、録画番組・DVD利用調査によると、2歳児の視聴時間は、計2時間50分、加えて、内閣府が同年に実施したインターネット使用時間に関する調査によると、2歳児の利用時間は平均1時間を超える。つまり、2歳児が多様なメディアを通して何らかデジタル情報の視聴に費やす時間は、一日平均4時間に迫る。3歳児になり、多くの子どもが園に通うようになるとその時間は減るが、入学時まで平均3時間以上は、音声を機械から入力させている。内閣府の調査は加えて、子どもたちの多くが、大人の古くなったスマートフォンを用い、自宅のwifiを使って視聴している実態を示している。つまり、ボタンを押せば、刺激が流れ、その刺激さえも周囲の大人に共有されていないという現実がある。孤独と自立は異なる。ある種、言語的孤独に多くの子どもはいる。また、場合により、指示ばかりを与える家庭や園で育った子どもは、大人の声そのものに対する関心を喪失させ、約束事ばかりを押しつけるしつけ絵本の類いしか選んでもらえなかった子どもは、本に対する信頼も失い小学校に入学することとなる。

したがって小学校低学年においては、それ以前に読み聞かせをたっぷりしてもらった子どもは、さらに彼ら彼女らの興味に応じた選書を、そして、先に述べた子ども達には、再び大人の声と本に対する信頼を取り戻す作業が学校図書館あるいは学級での読み聞かせが必要となる。

小学校中学年以降の子どもの多くは、自身の読みスキルを用いた自立的読みが可能となる。しかし、『AI vs 教科書が読めない子どもたち』の著者新井紀子氏は、全教科の内容を正確に読めているのは小学生の場合、せいぜい、クラスの2、3人であると指摘する<sup>2)</sup>。それは、一見、本を読んでいるように見える子ども姿からは推測しづらい。学校図書館は、子どもの読みの力を育てる役割もある。読みと一言でいっても、心理学の領域においては細分化されて扱われる。例えば、文字を音に変換するステップ、一文の意味を理解するステップ、前後の文意をつかんで内容を推測していくステップ等である。後半のステップこそ、人間本来の能力が発揮されるにもかかわらず、そこに至らない子どもが実に多い。自立的読みを促され始める中学年の子どものみならず、最初のステップにかかる認知コストを削減し、お話の世界そのものを楽しむことができる読み聞かせが有用であろう。

高学年以降になり、第二性徴を迎えた子どもたちは、青年期（前期）に入る。ホルモンの分泌が盛んになり身体も次第に性に応じて変化する。その際、身体の変化を肯定的に受けとめることができないのは、男児に比べ圧倒的に女兒が多い。人に相談しにくいことを、本に知識を求めようとする際、学校図書館はそれに応えることはできているであろうか。また、この時期、自らの性に対する違和を明確に生じさせる子どもが現れる。UCLA の調査によると、LGB の特性をもつ人の割合は、およそ 3.4%、つまり、クラスに一人は存在する。学校司書が一人ひとりの姿に思いを巡らせながら、彼ら彼女らが、今求めていること、悩んでいるかもしれないことに、選書を通して応える姿勢は、一人の子どもを救い、また、性に関する多様な個性について相互理解を促す可能性がある。SDG's の第5の目標、「ジェンダーの平等」に近づく道もここにある。

中学・高校生は、進路選択も含め、アイデンティティの確立が発達課題となる。「自分とはいかなる存在か」といった問いは、この時期の子どもの中心的関心ではあるが、気になるのは、その問いに向き合う時間が若者にあるのかということである。塾等を含め、放課後のスケジュールが過密になっていることに加え、隙間時間でさえ、手軽なスマートフォンのゲームや動画視聴で埋まってしまう。つまり、若者の時間の争奪戦がいたるところで繰り広げられている。若者の関心を再び、学校図書館に向かせるには、人である学校司書の存在が要となる。

中学校の学校司書であった小幡章子氏は、生徒にお勧めしたい本を集めた本棚を貸し出しカウンターの前に作り、時に勧めたり、生徒が関心を持って読んだ本の感想をカウンター越しに語り合ったりといったことを通して、生徒との心の交流を生み出したエピソードを多く紹介している<sup>3)</sup>。生徒が自らの足で学校図書館に出向き、人と出会い、会話を重ねるその時間は、本への信頼を回復し、再び、本を通して自分と向き合う時間への橋渡しとなる。学校司書の役割は大きい。



## 6 学校図書館・学校司書は何によって評価されるのか？

岡山県立図書館は、令和3年3月に、第4次中期サービス目標を発表した。私は、同目標について議論する評議会に委員として参加させていただいた。机の上に用意されていた資料を目にした際、感動を覚えたのを記憶している。同計画において、以前は来館者数及び個人貸出冊数を指標として掲げていた。ある意味、目標が達成されたということもあるが、今回、同図書館は、指標を大きく変えた。同計画において、時代の変化を読み解きながら、多様な読書のニーズに応えていくこと、また、開かれた図書館になること等を目指し、SNSを通じた広報も目標となり、指標として、「ツイッターのフォロワー数」が新たに加わった。また、県内公立図書館との連携についても3次に引き続き目標とされるが、その指標として、貸し出し数とともに、「巡回相談実施延件数」が加わった。いずれも、図書館と利用者の繋がりを表す新たな指標と言える。

目標達成にむけ、評価の指標を何にとるかということは、実は大きな問題であり、それは、学校図書館においても例外ではない。

これまで述べてきたように学校図書館や学校司書が、「チーム学校」の一員として教育の一環を担っていること、また、一人ひとりの発達や個性に応じた選書や館内の整備を行うことが役割としてあることを鑑みると、来館者数・貸し出し数の指標のみをもって、学校図書館や学校司書の働きを評価することには疑問がある。

学校図書館での子どもの様子を他の教員と共有した回数や時間、子どもと会話を交わした回数や時間、初めて、自発的に図書館に足を運んできた子どもの数、子どもからの図書のリクエストの数等も考えられるであろう。新しい時代に応じた評価・指標についても議論をスタートさせる必要がある。

学校図書館の現場において、日々の改善は進んでいると推測するが、一つ気がかりな点がある。



それは、学校司書に対して、これまで記述してきたように、時代の要請に応じた読書支援を行うことが期待されているにもかかわらず、地方自治体によっては、学校司書の配置が十分ではなく、学校図書館が閉鎖している日があったり、また、学校司書の研修機会が十分でなかったりすると聞く。首長はもちろん、一市民が等しく、現代の児童生徒の成長にとって、学校図書館と学校司書の役割の重要性を認識することが求められる。児童生徒が集う場としての学校図書館、そして、本を通して児童生徒の成長に寄与する専門家としての学校司書の役割をいかに伝えることができるか、知恵を絞っていく必要がある。

#### 引用文献

- (1) メアリアン・ウルフ/大田直子訳 (2020) 『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』 インターシフト
- (2) 新井紀子 (2018) 『AI vs 教科書が読めない子どもたち』 東洋経済新報社
- (3) 脇明子・小幡章子 (2011) 『自分を育てる読書のために』 岩波書店

第54回岡山県学校図書館研究大会 真庭大会 分科会一覧

	A	B	C	D
	学校図書館の運営・連携	豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせる学校図書館	主体的に学ぶ力を育てる学校図書館	心をつなぐ絵本
小学校	<p>【発表題】 「ICTでつながる学校図書館～児童・保護者・地域過去・現在・そして未来へ～」 《発表者》 新見市立新砥小学校 教 諭 小松 順子</p>	<p>【発表題】 「豊かな心を育む図書館教育～読書に親しむ機会と環境整備～」 《発表者》 瀬戸内市立牛窓北小学校 教 諭 倉元 圭子 学校司書 宮崎 博子</p> <p>【発表題】 「じょうぶな頭 まあるい心を育てる 学校図書館」 《発表者》 美咲町立旭小学校 教 諭 花谷 陸</p>	<p>【発表題】 「主体的な学びにおける学校図書館活用・司書との連携のあり方」 《発表者》 岡山市立御野小学校 教 諭 西森 友美</p> <p>【発表題】 「主体的な学びを生み出す授業づくり～学校司書と連携した学習を通して～」 《発表者》 岡山市立牧石小学校 教 諭 山内 祐子 学校司書 武中 陽子</p>	<p>【発表題】 「教師と子ども 子どもと子どもの心をつなぐ～「繰り返し絵本」「参加型絵本」の読み聞かせを通して～」 《発表者》 岡山市立豊小学校 教 諭 酒本 薫</p>
中学校	<p>【発表題】 「図書館との連携を基にした授業づくり～図書館を起点とした学校間ネットワーク～」 《発表者》 備前市立吉永中学校 教 諭 米本 大夢 学校司書 佐藤 美子</p>	<p>【発表題】 「本につなぐ 本でつなぐ～国語科における読書指導の工夫～」 《発表者》 倉敷市立南中学校 教 諭 藤本 久美 教 諭 越智 友美</p>	<p>【発表題】 「主体的に学び合う授業を支える学校図書館」 《発表者》 岡山市立岡北中学校 指導教諭 利守 雅行 学校司書 羽原 祐子</p> <p>【発表題】 「興味を広げる図書館～いろいろな工夫～」 《発表者》 津山市立北陵中学校 教 諭 市村 舞子</p>	<p>【発表題】 「心をつなぐ絵本～命と向きあう絵本～」 《発表者》 倉敷市立庄中学校 教 諭 難波 真</p>
高等学校	<p>【発表題】 「図書館利用の促進を目指した取り組み」 《発表者》 岡山県立高梁高等学校 教 諭 官尾 章生</p>	<p>【発表題】 「ビブリオバトルについて」 《発表者》 岡山県立邑久高等学校 教 諭 阿部 雅美</p>	<p>【発表題】 「ニーズに応える学校図書館づくり～倉敷中央高校の取り組み～」 《発表者》 岡山県立倉敷中央高等学校 司 書 古賀 美佳子</p>	
指導助言者	岡山県立倉敷青陵高等学校 校 長 内田 博文	岡山県立津山東高等学校 校 長 園田 哲郎	倉敷市立玉島高等学校 校 長 辻田 詔子	真庭市立中央図書館 前館長 杉浦 俊太郎

ICTでつながる学校図書館  
～ 児童・保護者・地域  
過去・現在・そして未来へ ～

新見市立新砥小学校 教諭

小松 順子

## 1 はじめに

本校は、岡山県北西部の新見市西南部に位置する、標高500mの自然豊かな高原地帯にある。阿哲富士とも称される鐘状火山「荒戸山」、岡山県天然記念物「姫ボタル（金ボタル）」、スズランの自生地である「おもつぼ湿原」があり、米作やトマト、ピオーネの栽培の他に、近年では西日本第一位の生産量を誇るリンドウ栽培も盛んである。

この恵まれた環境の中で、地域・保護者の方々と共に伝統ある教育活動が継続されている。42年間続く「版画カレンダー制作」、26年間続く「金ボタル保護活動」は新見市ふるさとキャリア教育の一環として特色ある取組である。令和2年度には、地域を題材とした探究的な取組に対して、県教育委員会「晴れの国おかやま学びたい賞：最優秀賞」を受賞した。また、ロボットプログラミング学習を推進し、平成29年度「Pepper社会貢献プログラミング小学生部門：全国金賞」を受賞するなど、ICTの利活用にも熱心に取り組んでいる。

これらの特色や強みを生かし、本校の学校図書館が、児童、教職員、保護者や地域の方々にとって有効に活用されるよう工夫改善を図りたいと考え、本主題を設定した。

## 2 具体的な取組

### (1) 教職員・児童アンケート

#### ① 教職員アンケートより

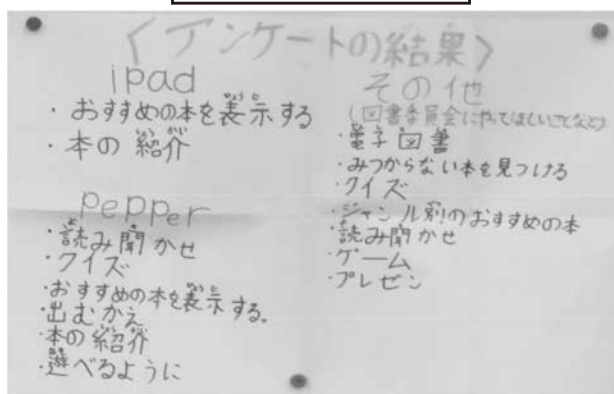
「Pepperの活用・Zoomの活用・地域教材の保存（アーカイブ）」などの意見が出された。図書館担当を中心に全職員で計画を立てて実践することにした。

#### ② 児童アンケートより

図書委員会が3年生以上にアンケートをし、集計結果を発表した。「Pepperの活用」

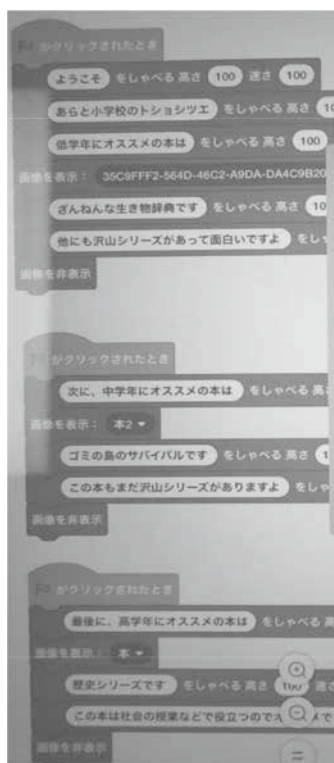
についての意見が多く出され、みんなが親しみをもって図書館を利用できるようなプログラミングを行うことにした。

### 児童アンケート結果



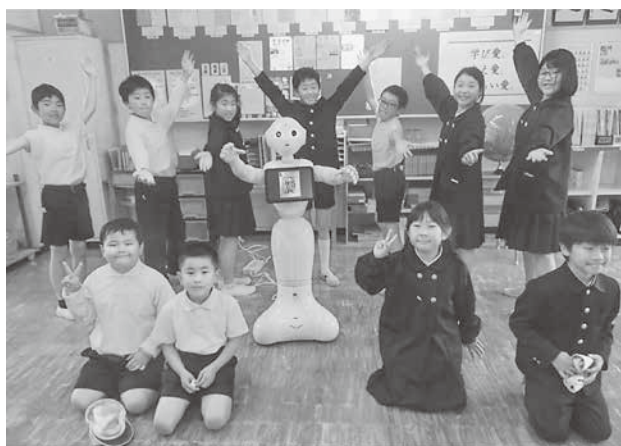
### (2) Pepperの活用

児童が考えたプログラミングの内容は『出迎えるあいさつ→おススメの本の紹介（低・中・高）→読書の呼びかけ』である。話すスピー

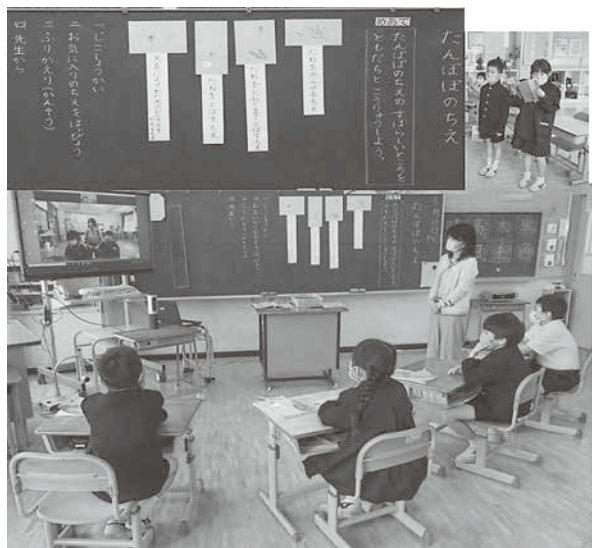


ードや内容、みんなに楽しんでもらえるような動作も工夫しながら完成させることができた。他学年児童からは、「すごい。ぼくもPepperを動かしてみたい。」「本の紹介がよくわかったので、すぐに読んでみたくなった。」と感想が寄せられた。プログラミングを担当した6年生児童は、「3度も改善を繰り返し、無事に完成して達成感がある。みんなに喜

んでもらえてうれしい。もっと工夫するつもりだ。」と意欲を高めることができた。



(3) Zoomを活用した他小学校とのオンライン授業「たんぼのちえ」(光村図書・第2学年) 単元計画の第三次において「たんぼのちえのすばらしいところを、ともだちとこうりゅうしよう。」のめあてに沿って、選んだ理由も発表しながら音読し交流を深めることにした。他校の友だちとZoomで学習できるとあって、導入時から大変意欲的に取り組むことができた。当日は、「まるでお話を書いた人のように読めていたよ。」「わた毛がふわふわとんでいるみたいに読めていたよ。」との感想を聞いて、「音読を聞いてもらってうれしかった。」「こうりゅうが楽しかった。」「あっという間だったのでもう一回やりたい。」と振り返ることができていた。また、担任の先生方からお勧めの本の紹介があり、読書意欲を高めることができた。今後は、新見市立中央図書館ともZoom等による交流を予定している。



#### (4) 地域教材の保存(アーカイブ)

長年積み重ねている地域教材(ふるさと学習)をデータ化して保存し、いつでも誰でも活用できるようにした。図書室のノートPCに保存し、閲覧できるようにしている。

##### ① 版画カレンダーづくりについて

###### 【保存内容】

- ①版画カレンダーの変遷 ②全カレンダー表紙
- ③杉原宏二先生(42年前からご指導いただいている先生)の言葉
- ④保護者・地域の声 ⑤制作の過程・新聞記事



1980年カレンダー表紙(最古)

##### 展示コーナー(H21に設置)



##### ② 金ボタル保護活動について

###### 【保存内容】

- ①金ボタル保護活動の変遷 ②保護活動の取組
- ③金ボタルを守る会会長の言葉
- ④保護者・地域の声 ⑤新聞記事

##### ③ 新見市のリンドウ栽培について

###### 【保存内容】

- ①取組について ②児童作成新聞
- ③「晴れの国おかやま学びたい賞:最優秀賞」DVD
- ④「假屋崎省吾氏オンライン生け花授業」DVD
- ⑤栽培農家:奥山亮さんの言葉 ⑥新聞記事

今後、アーカイブの配信も検討中である。

### 3 終わりに

「学校の中心には図書館がある。」校長が常々口にしている言葉である。ICT活用の工夫により、人やものが十分ではないという本校の弱みを補い、より深い学びの場としての可能性を確信させてくれる。

令和2年度の総貸出冊数は5,259冊。個人貸し出しが300冊を超える児童は4名。全校児童35名の小規模複式校にあっては、大きな成果と考えられる。研究は緒に就いたばかりであるが、今後もICTの環境整備と共に、児童や教職員、保護者や地域の方の思いや願いをICTでつなぎ夢の実現に向けて邁進していきたいものである。

## 図書館との連携を基にした授業づくり ～図書館を起点とした学校間ネットワーク～

備前市立吉永中学校 教諭 米本 大夢  
学校司書 佐藤 美子

### 1 はじめに

#### (1) 本校の紹介

本校は備前市の北部に位置している。学区には緑豊かな田園地帯が広がり、町内には池田家墓所、車で 10 分ほどの距離には閑谷学校などの史跡を有している。本校は 1 学年 1 クラス、特別支援学級 1 クラス、計 4 クラスからなる全校生徒 98 名の小規模校である。

#### (2) 本校の図書館

本校の図書館は、本館 1 階の玄関の靴箱から約 3 メートルのところのところに位置し、誰もが利用しやすい環境が整っている。平成 23 年には図書館のマスコットキャラクター「よももん」が誕生し、本校独自の読書啓発週間「よももんフェスティバル」を季節ごとに年 4 回おこなうなど、活気ある図書館である。

### 2 授業づくり

今回はそんな本校図書館が授業づくりに果たしている役割を、3 年生国語「論語」の授業実践を通して紹介したい。

#### (1) 単元の概略

本校生徒にとって「論語」は特別なものである。閑谷学校の近くに位置する本校では、小学生のころから論語に親しみ、中学校 1 年生時に閑谷学校で論語の素読をおこなっている。9 年間の論語学習の総決算と位置付けて、3 年時の「論語」の単元を扱っている。

単元の根幹となるのは、論語の章句の中から自分の座右の銘となる章句を探し、自分の経験やこれからの展望と結び付けながら、皆に紹介するという活動である。しかし、教科書に掲載されている章句は限られているため、全員が自分の心に響く章句を見つけることが難しいのが課題であった。そこで、本単元を充実したものとするため、図書館との連携を

おこなうことにした。

#### (2) 学校間での連携

##### ① 参考文献リストの共有

「論語」を扱った書籍は非常に多い。その中から授業の参考文献として扱う書籍をリストアップするだけでも大変な労力である。そこで、本単元を先行実施していた同じ備前市の日生中学校と参考文献リストの共有をおこなった。

このリストを本校で再度検討し、本校独自の論語ブックリストを作成した。

##### ② 蔵書の共有

この参考文献を集める際には、岡山県立図書館、備前市立図書館のみならず、備前市内の各中学校の図書館にも協力していただいた。その結果、合計で 50 冊を超える参考文献を集めることができた。

##### ③ 授業の共有

日生中学校でおこなわれた「論語」の授業は公開授業として備前市内の各中学校の国語科教員が参観した。授業参観の後には、研究協議をおこない、各校教員の指導、助言のもとに授業のブラッシュアップを図った。

#### (3) 授業者と学校司書との連携

##### ① 学習者に関する情報共有

本単元を実施するにあたり、学校司書に対象学級の実態を伝え、どのような参考文献を提示すべきか協議をおこなった。

授業の度に、進捗状況を学校司書と授業者で共有し、生徒がどのような本を手にとっているかというフィードバックもおこなった。

##### ② 参考文献に関する情報共有

集めた参考文献の数が多く、授業者がすべてに目を通すことが困難だった。そこで、それぞれの参考文献の特徴を学校司書に教えていただき、生徒へ提示する資料の検討をおこ

なった。

### ③ 授業での連携

本単元の最初の授業では、図書館司書がブックトークをおこない、おすすめの本を紹介することで、参考文献を選ぶ際の手がかりを生徒に示した。

### ④ その他

集めた参考文献は、学校司書により難易度や形態によって4種類に分類され、生徒へ提示された。4つの分類は以下のとおりである。

(A) 論語初級編

(B) 論語の読み方

(C) 物語・エッセイ・漫画

(D) 図解集・その他

(D)のその他には、本校の学校司書が作成したプリント、論語を扱った新聞記事の切り抜きが加えられるなど、授業者の蔵書など、様々な種類の資料が準備された。

また、それぞれの文献の目次のページ、読んでもらいたいページにあらかじめ付箋を貼り、効率的に学習を進められるようにした。

授業以外の時間帯にも参考文献を手にとれるように、本棚は図書室の特設コーナーとして設置した。



## 3 成果

### (1) 学校間交流について

学校間で参考文献の共有により、効率的に資料収集をおこなうことができた。

参考文献というハードの部分の共有にとどまらず、学習指導案、授業内での図書館司書のブックトークの原稿、教員同士の指導スキルやアイデアといったソフト面の共有もおこなうことができた。

授業参観をおこなうことで、授業のイメージが明確となった。特に、学習に困難を抱えている生徒へ提示すべき資料、章句ごとに提示すべき資料はどれが良いかなど、その後の授業実践に大変役立つものとなった。

### (2) 授業について

本単元を受けた昨年度の3年生22名が選んだ章句は、17種類を数えた。数ある章句の中から選んだことにより、自分自身の体験やこれからの目標と結び付けた発表をおこなうことができた。

また、4つに分類した資料の中から、異なる分類の文献を用いて、対象となる章句を調べるように指示した。その結果、漫画や図解集などの比較的平易な内容の文献で自分の気に入った章句を探し、章句の概略をつかんだうえで、難易度の高い文献を用いて章句をより深く解釈するという学習の流れを作ることができた。

### (3) 課題

今回の実践で生まれたネットワークを今後も活用し、より強固なものにしていくことが今後の課題である。国語だけではなく、他教科と図書館との連携、学校間の連携の強化が挙げられる。

特に学校間の連携をおこなうことは、小規模校が多い備前市の中学校にとって、指導技術を共有する大変貴重な機会であり、若手教員にとっては学びのきっかけとなる。令和2年度は「論語」の単元のみで終わった学校間交流だが、令和3年度以降はその数を増やし、指導技術のさらなる研鑽に努めていきたい。

## 4 おわりに

今回の実践を通し、備前市が有するリソースの大きさに気づいた。特に、各中学校図書館には、経験、知識ともに豊富な学校司書がおり、そのスキルをこれまで授業に活かす場を作ることができなかったことを深く反省した。

少子化に伴い学校の小規模化が続いている昨今、教員数も減り、教員間での指導技術の伝承が難しくなっている。それに加え、教員の働き方改革など、業務の効率化も求められている。そんな中、今回の実践で構築したネットワークの活用は、これらの問題を解決する糸口になるのではないだろうか。

## 図書館利用の促進を目指した取り組み

岡山県立高梁高等学校 教諭 官尾 章生

### 1 はじめに

本校は、創立 141 周年を迎えた歴史をもつ伝統校である。校舎は備中松山城の御根小屋跡(県指定史跡)に建ち、その中心には小堀遠州作庭の心字池がある。普通科と家政科の 2 学科を設置し、13 クラス・410 名の生徒が在籍する。

本校図書館は本館の 4 階にあり、蔵書冊数は約 27,000 冊である。その他にも、正門横に建つ大正 14 年に図書館として建てられた有終館にも 6,500 冊の蔵書がある。

### 2 現状の把握

図書館の利用状況としては、貸出冊数が 2016 年度より減少傾向にあり、2015 年度までは平均 6,000 冊だった貸出冊数が 2018 年度には 2,827 冊まで落ち込んだ。

その要因の一つとして、高梁市図書館オープン(2017 年)の影響が挙げられた。それらを調査するため 2018 年に「図書館利用アンケート」を実施した。その結果として、「学校図書館をほとんど利用しない」と答えた生徒は 79%にのぼり、理由としては「場所が遠い」「本を読む習慣がない」「忙しくて時間がない」というものだった。そして「学校図書館以外の図書館を利用したことがあるか」という質問に 81%の生徒が「ある」と回答し、うち 60%が「高梁市図書館を利用」と回答している。このことから学校図書館以外を利用する生徒が多いという現状も分かった。

また、全国学校図書館協議会発行の雑誌『学校図書館』に掲載された「子ども読書の現状」での高校生の平均読書冊数の推移を見ると、2017～2018 年度の読書冊数は全国的に減少傾向にあることが分かり、一概に高梁市図書館の影響だけとは考えにくいとの結論に至った。

この結果を踏まえ、2018 年度から本格的に図書館利用の促進を目指した取組に着手した。

### 3 実践

#### (1) 授業との連携

① 英語科との連携として、英語の多読用書籍を約 500 冊購入し「英語多読本」の充実を図った。英語多読の課題のために多くの生徒が図書館を訪れるようになり、貸出冊数だけでなく来館者数も増加した。また、多読本だけでなく他の本にも興味・関心を持ってもらえるように、授業内容と連携した特集コーナーづくりや、展示方法の工夫などを行った。生徒からは「こんな本があったのか」「本を読みたくなった」という声が聞こえるようになり、多読本とともに複数冊の本を借りる生徒が増え、図書館に来るきっかけづくりにもなった。

② 芸術科「美術」との連携では、図書 POP 製作の授業の際に、参考になる資料の紹介や提供を行った。そして完成した作品は、図書館内に本と一緒に展示をした。友達の作った POP や紹介する本が特設展示されていることで生徒の関心を集め、普段貸出の本が借りられる傾向が見られた。

③ 本校では総合的な探究の時間(総探)の中で、地域に関する探究活動を行っている。以前は、調査・研究で図書館を利用する生徒は少数であったため、図書館を活用してもらえるよう様々な取組を行った。

まずは、総探コーナーの設置である。高梁市に関する郷土資料を書庫から移動し、高梁市や岡山県に関するパンフレットの収集とファイリング、参考になりそうな新聞記事(高梁市の地域学関連・他校での総探などでの取組・SDGs 関連)の切り抜きをファイリングし、必要な時に見られるように整備した。その他にも探究学習に役立つ本を集めて展示をし、本以外の情報検索に役

立つサイトの紹介も行っている。

また、「蔵書検索システムの使い方」「新聞記事検索を試みよう」「RESAS(リーサス)を活用してみよう」の3本の動画を作成して情報検索のための支援を行った。

#### (2) 高梁市図書館との連携

美術と連携して製作した図書POPを、高梁市図書館でも展示をしてもらった。その準備に図書委員が参加し、展示方法や案内看板の書き方などを教えていただいた。今後の委員会活動にも役立つとても貴重な体験ができた。

高校生の貸出冊数の低下は本校図書館だけでなく高梁市図書館でも課題となっているとのことで、今回の展示をきっかけにして今後も連携をしながら読書活動推進に取り組む予定である。

#### (3) ICTを利用した取組

本校はGoogle Classroomを利用しており、図書館通信も紙面配布から配信に変更した。カラーで見やすくなり生徒の関心を引くことができた。また、図書館からのお知らせなども配信することで、周知もしやすくなった。

さらに、蔵書検索システムから「本の予約とリクエスト」が行えるようにし、生徒が“読みたい”と思った時に資料の予約やリクエストをすることが可能になった。

また、毎年4月に1年次生を対象に行っている図書館オリエンテーションでは、総探などでの活用を視野に入れ“本の分類”“図書検索の方法”“新聞記事検索”などについての説明を行い、実際にChromebookを使って利用体験を行った。オリエンテーション後には来館時に自分で蔵書検索をする1年次生が増えた。

新刊の紹介は、毎月発行する図書館通信と、図書館内・職員室前の掲示物だけで行っていたが、より多くの生徒に伝わる方法を検討した結果、新たに職員室前にモニターを設置し、メディアプレイヤーを利用してスライド形式で本の紹介やお知らせなどを流すようにした。それを見て本を借りに来る生徒の姿も多く見られるようになった。

#### (4) その他の取組

「図書館が遠い！」という生徒の声に応え、読書週間に合わせて移動図書館を昼休みを利用して校舎1階の購買前で開催した。また、

図書委員がブックハンティングを行い「図書委員のおすすめ本コーナー」として展示したり、文化祭でも本に関する展示を行った。他にも、茶室「光風館」でのブックカフェ、本校に所蔵している資料を一般公開する「所蔵品展」の開催。そして、先生方のおすすめ本を紹介した冊子「Book Collection」の配布、図書委員による本の紹介「ライブラリーニュース」を毎月発行するなどの取組を行っている。

#### (5) アンケートの実施

2018年度に実施した「図書館利用アンケート」と同内容のアンケートを2021年4月にも実施し、比較を行った。結果としては、「学校図書館をほとんど利用しない」と答えた生徒が79%から41%に減少し、学校図書館の利用頻度が高くなっていることが分かった。また、「学校図書館以外の図書館をほとんど毎日利用、週に1回利用」と答えた生徒が30%から10%に減少していることも分かった。そして、学校図書館を利用する目的として「読書」と回答した生徒が48%から73%となり、読書に対する意識が高まっていることも読みとれた。自由記述欄には、「特集コーナーを見るのが楽しみ」「過ごしやすい」「なるべく行けるようにしたい」といった意見や感想が寄せられた。

## 4 成果と課題

生徒の貸出冊数の変化を見ていくと、2018年度には2,827冊だったが翌年の2019年度には4,132冊、2020年度には6,789冊と増加した。特に、総探で図書館を活用する生徒数、本に関する司書への相談や問い合わせなどにおいても増加傾向が見られ、これまでの取組の成果が出てきていると実感している。

不読者への働きかけや生徒の求める情報の収集と効果的な伝達方法の検討・提供を課題と考えている。今後も様々な取組を継続して行い、先生方とも連携をとりながら学習・情報センターとしての機能を果たすことのできる、魅力ある学校図書館となるよう励んでいきたい。また、高梁市図書館との連携も継続し、地域全体で読書活動の推進に取り組んでいきたいと考えている。



# 指導助言一分科会 A

## 『学校図書館の運営・連携』

指導助言者 岡山県立倉敷青陵高等学校 校長 内田 博文

「豊かな心と主体的に学ぶ力を育む学校図書館」という今年度の研究テーマは、児童・生徒にこれからの社会を生き抜く力を身に付けさせるために、学校図書館がどのような役割を担っていかなければならないかを改めて考えるきっかけになっています。

社会の在り方が劇的に変化する「Society5.0時代」が到来する一方で、新型コロナウイルス感染拡大が示しているように、「VUCA」と呼ばれる、社会の変化を予測することが困難な時代になっています。そうした状況の中で、新学習指導要領では、ICTを効果的に活用しながら、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の育成が求められています。

また、一人一人の児童・生徒が、自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、他者と協働しながら、社会の変化を乗り越える力を身に付けていくことが求められています。

つまり、これからの学校教育では、社会に開かれた教育課程を基盤として、主体的・対話的で深い学びを実践することで、児童・生徒自身が豊かな人生を切り開けるような力を育成し、児童・生徒を持続可能な社会の創り手として育成することが求められていることとなります。

こうした観点に立つと、3校の取組は、新学習指導要領が求めている内容に答えようとしているものであると感じました。他者との協働や地域との連携を通じながら児童・生徒の興味・関心を引き出し、より発展的・応用的な学習へと誘い、児童・生徒の主体性を高める工夫がなされていると思います。

新見市立新砥小学校では、ICTの活用を通じて図書館を深い学びの場として位置づける取組が進められています。児童がプログラミングしたPepperによる読書啓発活動や、Zoomを利用した他校とのオンライン授業の実施は、小規模複式校であっても様々な活動ができることを実証しています。

中でも、Pepperのプログラミングを担当した6年生が、他学年の児童が寄せた感想によって達成感を感じ、さらに工夫を重ねたいという意欲を持ったことは、素晴らしい成果です。他者からの評価によって自己有用感や自己肯定感が芽生え、学びに向かう力が高まり、より深い学びへの発展が期待されます。

昨年度の総貸出冊数が提示されていますが、この数値から考えると、児童一人が、年間150冊以上の本を借りたこととなります。一人の児童が一週間に3冊の本を借りて読んだということになるのですが、この数値だけを見ても、取組が大きな成果を上げていると言えるのではないのでしょうか。

また、備前市立吉永中学校の取組では、これからの社会において学校図書館がどのような役割を果たさなければならないかが提起されています。知識の拡充という、学校図書館がこれまでに有してきたセンター機能だけでなく、授業の支援や、授業者と協働した授業づくりも担えるという学校図書館の新たな役割や機能が示されています。

この取組では、授業単元目標の実現に向け、参考となる蔵書や文献リストを地域の学校や施設と共有することが土台となっています。しかし、共有だけにとどまらず、学校司書が授業づくりや授業の振り返りにまで関わることで、知識の定着と表現力の伸長を生徒にもたらし、授業者のスキルアップにもつながっています。

特に、連携によって授業を効率的に実施できることは、学習に困難さを抱えている生徒への指導が行き届くことにつながり、「個別最適化された学び」へと進展するよう感じました。

最後に、貸出冊数の減少という多くの学校図書館が抱える課題の改善に挑んだ、岡山県立高梁高等学校の取組は、学校図書館の魅力づくりという面で一つのモデルケースとなるように思いました。

「図書館利用アンケート」を通じ、生徒の声を拾い上げていますが、こうした現状分析により、取り組むべき課題が明確になったことで、授業や地域の公共図書館との連携、ICT の効果的な活用等の具体的な対策を進めることができます。中でも、生徒の声に応えた「移動図書館」のアイディアは、わずか2年で貸出冊数を約2.4倍に引き上げたことと無関係のようには思えません。

施設・設備の都合上、教室から遠く離れた場所に図書館が設置されている学校も少なくありません。設置場所が図書館利用に影響している状況もあるでしょう。しかし、読書週間という限定された期間だけでも「移動図書館」を設置し、足を運びやすい状況をつくれば、生徒の読書及び図書館への興味・関心を高めるきっかけになることを実証できたのではないのでしょうか。

社会の高度情報化が進む一方で、児童・生徒の読書離れ、活字離れもより進み、利用の促進が学校図書館の抱える共通の課題となっています。学校図書館の運営・連携を通じ、豊かな心と主体的に学ぶ力を児童・生徒に身に付けさせようとする取り組みだ3校の研究・実践は、この課題の改善に向けて、大変意義のあるものであり、今後の学校図書館の在り方や方向性を示すものでもあったと感じました。

これまでは、読書によって知識を獲得したり、得た知識を拡充させたりすることが、学校図書館の利用促進にとって大きな意味をもっていました。けれども、主体的・対話的で深い学びを実践し、児童・生徒にこれからの社会を生き抜く力を身に付けさせるためには、知識の獲得・拡充以外での図書館の役割を考えていく必要があります。

獲得した知識を活用する学習活動を行わなければ、変化していく社会の中で生き抜く力を児童・生徒に身に付けさせることはできません。知識の獲得の第一歩は、児童・生徒に、身の周りや社会の事物・出来事に対して興味・関心を持たせることでしょう。そして、その興味・関心を読書に向かわせ、「本を読んで知識を得る、獲得した知識を用いて思考する、そして考えたことや感じたことを表現する」という学習活動に取り組ませることで、知識は「生きた知識」となって定着し、豊かな心が育まれていくでしょう。

児童・生徒が、主体的に学習活動を進めていく上で、学校図書館をどう運営し、校内、あるいは校外と、どう連携していくかは非常に大切なことです。時代が変化していくからこそ、学校図書館が果たす役割は、ますます大きくなっていくはずで

## 豊かな心を育む図書館教育 ～読書に親しむ機会と環境整備～

瀬戸内市立牛窓北小学校 教諭 倉元 圭子  
学校司書 宮崎 博子

### 1 はじめに

本校は、瀬戸内市牛窓町北部に位置し、錦海湾を望む畑作の盛んな農業地帯である。児童数は62名、単学級の小規模校である。

図書室は斜面に建てられた校舎の地下1階にあり、教室のある地上1・2階からは離れた利用しにくい位置にある。休み時間には外で遊ぶ児童が多く、以前は図書室を利用する児童が1日を通して全くいない日もあった。児童が読書に親しむ機会を増やし、読書環境を整備することで、図書室を利用する児童を増やすことができると考えた。そこで、学校司書を中心に、児童が本に興味をもち、図書室を利用したくなるようなイベントを企画し実施した。企画にあたっては瀬戸内市内の8小学校から提供された実践を参考にしながら行った。

### 2 具体的な取組

#### (1) 本に興味をもたせるための工夫

読書が好きな児童もいるが、本に触れる機会が少なく、読書に興味や関心を抱いていない児童が多い。そこで、「面白そうだな。読んでみたい。」と児童が思えるよう、本に触れる機会を増やしたり、興味をもてような本の紹介をしたりした。

##### ① 本の福袋

1月のイベントとして行った。児童が興味をもちそうな本を袋に入れ、本の内容が分かるようなキーワードを手掛かりに一人一袋選べるようにした。自分では選ばない本との出会いになった。

##### ② 先生のおすすめ本とクイズ

全教職員が低中高に分かれ、各発達段階に応じたお勧めの本を選定し、粗筋やおすすめポイントと、その本を読まなければ分からないクイズをカードに書き、本と共に図書室に

展示した。図書室に来た児童は次々と本を手に取り借りていった。また、クイズにも興味をもっていた。



##### ③ テーマ展示

人権週間や給食週間に合わせて、関連する本や、クリスマスや節分など季節ごとの本、2月22日は「にゃんにゃんにゃん」のごろ合わせで猫の本を展示し、好評を博した。また、「11歳のバースデー」等、シリーズになっている本を展示することで、1巻から順に読了しようとする児童もいた。

##### ④ 読み聞かせ

毎月1回、ボランティアの方による読み聞かせを全クラスで行っている。また、読書週間には、担任以外による読み聞かせも行った。校長や事務職員、用務員など、普段は読み聞かせを行わない教職員が行うことで児童の興味を引き、好評を博した。

#### (2) 図書室に行きたくようになるための工夫

自分や友達の世界を掲示することで興味をもって図書室に行く機会をもち、本に触れる機会を増やせるようにした。また、楽しいくじ引きのおもちゃを設置することで、図書室に行こうとする意欲を高めることができたようにした。

##### ① ヨシタケシンスケコンテスト

ヨシタケシンスケの本に関連したイベントを行った。絵本「つまんないつまんない」を参考に、児童が「○○が○○だとつまんない」

と思うことを絵で表現したものを掲示し、気に入った絵に投票した。その絵を見るために多くの児童が図書室に来室した。児童の自由な発想が感じられる楽しい取組となった。

## ② ガチャガチャマシーン

本を多く借りられる券を入れたカプセルを中に入れた手作りのカプセルトイを用意し、来室して本を借りた児童が使えるようにした。お正月ガチャやバレンタインガチャなど、季節ごとに名称を変えて実施した。暗号ガチャは、カプセルの中に暗号が入っており、暗号を解くと本の題名が分かる仕組みになっており、新たな本との出会いとなった。

## (3) 本を読もうとする意欲を高めるための工夫

興味のある本と出会った児童の意欲がより高まるように、読書量が目に見えるようにした。また、家庭の協力を得て、家族で読書をする時間をもつことも有効であった。

### ① 読書チャレンジ

本を一冊読むごとに、シールを貼っていく活動を行った。読書週間には、クラスごとに台紙を配り、全員でどれだけ本を読むことができたかが分かるようにした。その後も、図書室に台紙を貼っておき、学校全体での取組として続した。



### ② 家族で読書

「家族読書週間」を設け、メディアを見る時間を家族で読書をする時間にしてもらおう、保護者に協力を求めた。親子で一冊の本を一緒に読んだり、兄弟で読み聞かせをしたりと、家族で触れ合うよい機会にもなった。

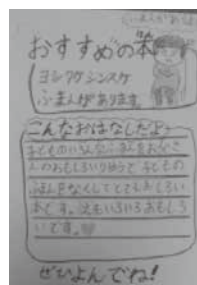
## (4) 読んだ本について発信する工夫

自分が読んで面白かった本を友達に紹介する活動を通して、さらに読書の範囲を広げられるようにした。

### ① 読書郵便

面白いと思った本の紹介文を葉書に書き、図書委員が友達に配達した。紹介してもらっ

た本を借りる姿も見られた。



### ② 読書の木

葉の形のカードに紹介文を書き、大きな木の掲示に貼って掲示することで、他学年の児童の紹介文も読むことができるようにした。



## 3 おわりに

### (1) 成果

- ・本に触れる機会や、読書に興味をもつ児童が増えた。図書室への来室者が大幅に増加し、多い日には30人を超えることもあった。また、貸出冊数が倍増するクラスもあった。
- ・展示や本を紹介し合う取組を通して、興味のある本や新たな分野の本との出会いをもつことができた。
- ・教職員や読み聞かせボランティア等、多くの大人が関わり、発達段階に応じた本を勧めることができた。

### (2) 課題

児童の主体的な学びに向かう力を育てるため、日頃から読書に親しむ機会と環境整備は必要不可欠である。瀬戸内市内の小学校では「ビブリオバトル」「ブックガイド」等、興味深い実践を行っている。今後も連携を図りながら有効な取組は互いに取り入れ、児童の豊かな心を育む学校図書館を目指したい。

## じょうぶな頭 まあるい心を育てる 学校図書館

美咲町立旭小学校 教諭 花谷 陸

### 1 はじめに

本校は、岡山市と津山市の間にある久米郡美咲町の西部に位置し、山と川に囲まれた自然豊かな環境にある。全校児童は77名の小規模校であり、令和5年には義務教育学校旭学園（仮称）として開校する予定である。

本校は、バス通学の児童が大多数であるため、運動不足解消として、始業前に朝遊びの時間と補充学習を目的とした朝学習の時間を確保しており、朝読書の時間は設けていない。読書に親しむ時間は、業間休み、昼休み、家庭が中心である。

隔週火曜日に学校司書が来校し、限られた時間の中で担任と連携しながら学習と関連した本の紹介や収集、季節に合った掲示やポップの作成など、図書環境の整備を行っている。

このような状況の中、読書を通して、自分の考えを自分の言葉で表現したり、本を使った学び方を身に付けたりする児童、多様な考えに触れ、互いに認め合う児童、すなわち「じょうぶな頭」「まあるい心」を持つ児童を育てたい。

ここでは、令和2年度の取組を紹介する。

### 2 具体的な取組

#### (1) 全学年共通の取組

##### ① 読書カード

全学年共通の宿題で読書に取り組んでいる。読んだ本の内容や感想を、読書カードに記録している。日々の宿題で読書をするにより、読書量が増加している。

##### ② 必読書・おすすめの本

児童が様々な本に触れる機会をつくるため、学年ごとに読んでほしい本を学校司書と担任が選んでいる。児童に必読書・おすすめの本の一覧を示し、読むように勧めている。

#### (2) 読み聞かせの取組

##### ① 中学生による読み聞かせ

小学校と中学校の距離が近いこと、中学校区に小学校が1校であることから、小中で様々な連携の取組が行われている。その取組の1つに、中学生による読み聞かせがある。1学期は中学3年生、2学期は中学2年生、3学期は中学1年生が来校し、1年生から6年生の各教室に分かれ、各学年の実態に合った内容の本を選んで読み聞かせている。

この取組により、児童は、中学生の心のこもった読み聞かせに触れることができた。その後、休み時間に児童同士が互いに感想を伝え合う場面が見られている。

中学校の図書担当教員は、小学校の各学年に合わせた選書、練習を通して聞き手を意識した読み聞かせにより、意欲や達成感が得られ、中学生としての自覚や心の成長にもつながる取組だと語っている。



【中学生による読み聞かせの様子】

##### ② 学校支援ボランティアによる読み聞かせ

地域の学校支援ボランティアが各学期に5回程度来校し、低中高学年に分かれて読み聞かせをしている。児童は学校支援ボランティアの方の読み聞かせを楽しんでいる。

児童は自分が普段手に取らない本に触れる機会だけでなく、地域の方々の温かさや本の楽しさを味わうことができていると考えている。



【学校支援ボランティアによる読み聞かせの様子】

### (3) 図書委員会の取組

#### ① みんなのおすすめの本

これは、図書委員会のメンバーが、自分が好きな本、他の人にも読んで欲しい本を絵と文で全校児童に紹介する取組である。

「〇〇さんのおすすめの本だから読んでみたい。」と、読書意欲を高めることができ、紹介された児童だけでなく、紹介した図書委員も、分かりやすく本の魅力を伝えようとする表現力を養うことにつながっていると考える。また、友達の紹介文から本の内容を想像したり、本を通じて友達と関わりを持ったりすることができた。

#### ② スタンプラリー

6月の読書週間の取組として、スタンプラリーを行った。期間中、本を借りるごとにスタンプラリーのカードにスタンプが押され、スタンプがたまると景品として図書委員が作成したしおりやぶんぶんごまなどがもらえる活動である。この活動で、図書室利用が増え、貸し出しカウンターに列を作ることもあった。



【スタンプラリーの様子】

#### ③ 読書クイズ

読書週間の取組として、読書クイズを行った。業間休みに図書室で図書委員が本に関するクイズを出し、参加した児童が答えた。

本に詳しい児童にとっては活躍の場となり、答えられなかった児童はクイズの後、出題された本を読んでいる姿が見られた。本に興味

を持つ機会となった。

### (4) 学校司書との連携

#### ① 教科との関連コーナー

教室の関連図書コーナーに、学習内容と関連のある本を置いている。児童が学習に関する本を気軽に手に取ることができるようにしている。

#### ② 帯の作成

4年生では、国語科で自分が好きな本のよさを紹介する活動として、本の帯を作成した。作成した帯を自分が紹介したい本に付け、教室に展示すると、帯を見て本を手取る児童の姿が見られた。

この活動を通して、児童は好きな本の魅力が伝わるように、読み手を意識した短い言葉と絵を使った表現の仕方を考えることができた。

#### ③ 「おすすめの本」の紹介

5年生では、相手意識をもって自分の「おすすめの本」を紹介するために、各学級に、5年生が考え作成した「おすすめの本」コーナーを設置した。2年生には、生活科と関連付けて、世界中のいろいろな形のこまを紹介する本が設置された。

相手を意識した紹介ができ、紹介された児童も、本の紹介者に感想を伝えることができた。

## 3 おわりに

これらの取組により、本を通して友達間、異年齢間の触れ合いが生まれ、自分が興味を持っていた本だけではなく、様々な本に触れる機会を作ることができた。

「じょうぶな頭」「まあるい心」を育てる上で、読書は大きな役割を占めている。本校は今後、義務教育学校になるが、これらの取組を精選し引き継ぎながら、児童の豊かな心の成長のために、図書館教育を充実させていきたい。

本につなぐ 本でつなぐ  
～国語科における読書指導の工夫～

倉敷市立南中学校 教諭 藤本 久美  
教諭 越智 友美

## 1 はじめに

令和3年度から完全実施されている新中学校学習指導要領では、国語科の学習が読書活動に結び付くよう、[知識及び技能]に「読書」に関する指導事項を位置づけるとともに、「読むこと」の領域では、学校図書館（以下、「図書館」と言う）などを利用して様々な本などから情報を得て活用する言語活動例が示された。

以前から、中学校では朝読書、図書委員によるお薦め本の紹介、読書週間でのイベント活動などで読書活動を活発にするべく様々な取組が行われてきた。しかし、それらの取組の多くは、図書館に足を運ばなければ活用されず、一部の読書好きな生徒以外への、図書館に行きたくなくなるような動機付けが必要であると捉えていた。

そこで、国語の授業で、「生徒と本」「教室と図書館」をつなぐ言語活動を工夫し、生徒が学校図書館を、「読書センター」として積極的に活用する場であると意識付け、興味付けることをねらいとして、前任校の倉敷市立東中学校と、共同研究校である倉敷市立南中学校で、今回の取組を行った。

## 2 具体的な取組

### (1) 計画

新中学校学習指導要領の読書に関する記述に即し、次のように言語活動を計画した。

1年	進んで読書をする	ポップ作り
2年	読書を生活に役立てる	帯作り
3年	読書を通して自己を向上させる	ブックトーク

### (2) 南中学校1年生，東中学校1年生の取組「本のポップを作ろう」

南中学校では令和元年度1年生，東中学校では令和2年度1年生がポップ作りを行った。南中学校では、光村図書の教科書で、中学校1年生に薦める本の一覧や読書教材の指導と関連させ作成した。東中学校では、「星の花が

ふるころに」を学習した後、例としてあらすじを入れたものを作り、その後図書館でそれぞれ紹介したい本を選んで作らせた。

どちらも大きさはB6サイズを基本とし、内容を分かりやすく伝える言葉の選び方をワークシートで指導し、形を成型させたり、色や絵を工夫させたりして、作成させた。実際に図書館の本に並べて展示し、より多くの人に紹介した本が読まれることを目的として作ることによって、図書館に行く生徒も増え、本を手取る生徒も増えた。



### (3) 南中学校2年生の取組「本の帯を作ろう」

1年生で本のポップ作りをした生徒が、2年生では、本の帯を作る活動に取り組んだ。

国語の時間に図書館で本を選び、色画用紙を使い、実際に本に巻き付けられるよう、太さや文字の割り付けを考慮して作らせた。



1年生の時にポップを作っているのでも、読みたくなるようなキャッチコピーを考えることができ、本の表紙とマッチするようなデザインも考えて作成することができた。ポップよりも紙面が大きくなったことが、より工夫された作品作りにつながった。

また、図書館に生徒が書いた帯が巻かれた本が置かれることで、「教室」と「図書館」のつながりが強くなり、生徒が本を手取る機

会が増えた。イラストや色使いに工夫のある、良い作品を紹介することで、アイデアが浮かばない生徒への参考になったことが、この授業の振り返りシートへの生徒の記述で分かった。

### (3) 東中学校3年生の取組「ブックトーク」

東中学校3年生では、毎時間の国語の授業の最初に1人ずつブックトークを行った。ブックトークの用紙に「題名」「作者名」「紹介文」を記入させ、教材提示装置で本の表紙や紹介したいページを映しながら説明させた。紹介後は、本の表紙を写真に撮り、紹介文の横に貼り付け、クラス掲示した。



紹介文を読んだ後には、質問コーナーを設けた。お薦めのシーンや好きな登場人物、あらすじでもう少し聞きたいことなど、いろいろと手が挙がった。普段の授業では意欲的でない生徒でも、本を用意し、前で紹介することができた。紹介文を書いておくことで、前に出て話すことへの不安が軽減したようである。また、自分の好きな場面を読み聞かせしたり、挿絵を見せながら説明したりする生徒もいて、聞く側の生徒も興味をもって聞くことができ、楽しい時間となった。1巡で終わる計画であったが、まだやりたいと生徒からの要望があり、継続性を重視することにし、卒業直前までかけて2巡目を行った。

また、掲示しておくことで、紹介文をじっくりと読むこともでき、次に読む本の選択肢としても参考にしていった。自分では選ばないようなジャンルや興味はあったが読めてなかった本の紹介を身近なクラスメイトからしてもらうことで、本を身近に感じることもできていた。生徒から生徒への言葉の有効性を感じることができた。

## 3 成果と課題

今回の2校3学年それぞれの実践では、国語科の授業を通して、「本と生徒」「授業と図書館」をつなぐ工夫について取り組んでみた。今までも図書館からの情報発信や呼びかけは

熱心に行われていたが、授業で全ての生徒に関わることを行うことで、双方向の結び付きのより有効な読書指導の一つとなることが分かった。また、東中学校と南中学校ではどちらも朝読書の時間を全校で設けているので、毎日読む本を全員が手元に置いている状態であることが、本の紹介のしやすさにつながっていると考えられる。本を読む時間が日常的にあることや、本を紹介するのが身近なクラスメイトであることなど、読書環境をより近いものとして整えることが大切であることが改めて分かった。

また、それぞれの学年の指導内容の段階に即した言語活動を、3年間を見通して系統的、継続的に行うことで、「本と生徒」「授業と図書館」のつながりが強まり、図書館での様々な取組がより効果的に活用されていくと考えられる。今年度もそれぞれの学年で今回の取組を継承していきたい。

課題としては、「読書」の指導内容に対する評価が挙げられる。今回の取組は、作品と作成過程の活動の様子や記述内容を評価することができる。しかし、指導内容の「役立つことを理解する」「読書に生かす」「関わり方を支える読書の意義と効用について理解する」について評価するには、指導内容についてより振り返ることのできる項目を示した評価シートを作らなければならない。

また、GIGAスクール構想により、タブレット端末が生徒個人で自由に使えるようになってくると、インターネットでの検索と図書館での調べ学習のバランスや方法としての選択の仕方について、指導しなければならない。

## 4 おわりに

若者の活字離れが問題となり、年間の読書量は年々減ってきている。しかし、実際目の前の生徒は、小学校の「図書の日」が楽しみだったと言い、朝読書の時間はそれぞれの本の世界に入り込んでいる。そして、自分の好きな本について語り、それを聞いてもらうことが好きである。時間や場の確保などの読書環境を整え、この生徒たちの「好き」を大切にして、国語科の読書指導に生かしていきたい。



## ビブリオバトルについて

岡山県立邑久高等学校 教諭 阿部 雅美

### 1 はじめに

邑久高校のビブリオバトルの取組は平成24年に始まり、今年度で丁度10年になる。(令和元年度の決勝大会は中止)この10年の取組を振り返ってみたい。

私が平成23年に本校に赴任した時、図書室は本棚が林立し、昼なお薄暗く、利用者は少なかった。図書課長の私は、どうしたものかと途方に暮れたが、図書委員会の生徒の熱意に救われた。「大の本好き」の彼らは「みんなにも本を読んでほしい」という一心で様々な取組を発案し、活動した。彼らの熱意が現在のビブリオバトルへとつながっている。

### 2 図書室改造と図書委員会の活動

図書委員の最大の要望は「図書室を快適な空間にする」だった。これを受け、赤木かん子氏(図書館改造運動家)に依頼し、図書室の改造を行った。約半年をかけて、約3万8千冊の蔵書を全て点検し、古くなったものは廃棄し(約1万4千冊)、高校図書館になくても良いと判断したものは隣接する市民図書館に寄贈した。この活動には図書委員だけでなく、全校生徒・教職員が献身的に協力してくれた。



【改造前】



【改造後】

図書室の改造が完了するまで、全ての書籍を校内の様々な場所に一時避難させたため、生徒に貸し出す本がない状態になった。そこで、図書委員はそれぞれが選書した本を「学級文庫」として教室に持っていき、貸出した。また食堂にも漫画・ライトノベルなどを置き、閲覧と貸出しを行った。現在も学級文庫と食堂への配置

は継続しており「サテライト図書館」となっている。

次の要望は「みんなに本を読ませたい」である。読書習慣がない生徒が70%という実態のなか、どうすれば関心を持ってもらえるのか。図書委員が導き出した答えは「読書は楽しいという体験を共有する」だった。かれらは様々な取組を実施したが、2つ取り上げたい。まずは「文学散歩」(H25~H28)である。岡山を舞台とする作品や歴史の地を巡る「文学散歩」は、事前に作品を読むことが条件であったため、図書委員以外の参加は稀であったが、遠足気分も味わえることから好評であった。

2つ目は「お菓子作り講習会」(H24~H29)である。「物語世界を体験しよう」をテーマにした「お菓子作り講習会」には、お菓子の出来上がりを待つ間に、取り上げた作品を読み、参加者同士が話し合う時間を設けていた。和気藹々と「好きどころ」を語り合う姿に、私は「ビブリオバトルができる」と確信した。当時の邑久高生は、本は読まないが、「創作」や「発表」を好む傾向があった。単に「目立ちたがり屋」が多かったのかもしれないが、読書体験の共有を喜んでくれそうな予感がした。

### 3 初代チャンプ本の誕生

第1回ビブリオバトルは図書委員と有志の参加で、放課後の図書室で行った。「そこにいる人に読みたいと思わせたらチャンプ本」という簡単な説明に、予想以上に生徒が集まった。パトラーの中に野球部の部長がおり、部員を動員したのだ。案の定、彼が紹介した漫画が初代チャンプ本に選ばれた。彼の名誉のために記しておくが、実に素晴らしい発表だった。彼は、「海戦」ものを取り上げたのだが、原稿を一切見ずに、時に数字をあげながら、堂々と語りきったのである。「漫画」ということを意識させない

素晴らしい発表であり、チャンプ本であった。

この第1回を受けて次年度から1, 2年を対象とするビブリオバトルを実施した。

#### 4 邑久高校のビブリオバトルの流れ

初代チャンプ本は「漫画」。本校では、現在も全ジャンル OK である。1番多いのはやはり小説だが、この10年の間に漫画・雑誌・写真集など様々な本が紹介された。

平成30年からは2年生のみを対象に実施している。(1年生は朗読大会に変更)入学時から、「読書シート」・「読書感想文」や「POP制作」を課題とし、読書に親しむよう促してきた。そして2年生の12月、いよいよビブリオバトル用の選書をする。現代文の授業の一環として、図書室に行き選書する。自宅の本が良いという生徒もいるが、「他の人が読みたいと思った時、図書室にないのがっかりする」と説明し、図書室の本から選書してもらう。

選書後、冬季休業課題として原稿作りに入る。5分の発表には1800字の原稿が必要だということ、大抵の生徒はうんざりした顔をする。1800字どころか400字にも満たない原稿を提出する生徒もいるが、普段から長文を書く経験が少ないので、長さは問わない。授業で「構成例」を示したりビブリオバトル公式サイトやYouTubeにアップされた全国大会の様子を紹介したりしている。休み明けに完成していない生徒は、放課後、図書室に残して書かせている。

原稿が出揃うのを待ち、1月末から2月初めに、授業を使って班代表を選出する。クラスを6班に分け、班ごとに原稿を回し読みさせ、班代表1本を選出する。今年度は提出された原稿に通し番号を付け、組・氏名などを消し、加えて他クラスの生徒の原稿を読ませた。誰の原稿か分からない方が純粹且つ公平に選出できるのではないかと考えたからだ。

班代表選出後、選出された生徒に原稿を返却し、LHRでのクラス予選会(1~2週間後)に向け、手直しを指示する。選ばれた生徒は「なぜ自分が」と嫌がるが、「書いた文章が良かったから」と褒めると、まんざらでもない表情を浮かべる。予選会では原稿を見ながら読み上げても良く、この段階では全ての生徒が読み上げる。クラス代表は1名とし、担任と生徒の投票によ

って選出される。



【体育館実施の様子】

3月中旬に決勝大会を行う。新型コロナウイルス流行以前は体育館に1, 2年生が集まり実施していた。教材提示装置を使い、体育館ステージ上のスクリーンに、紹介本を映し出している。



【リモート視聴の様子】

今年度はリモート開催にせざるを得なかった。不安もあったが、教室にいる教員から、音声・映像とも安定しており、集中できたと聞き安堵した。また全バトラーが、原稿を見ずにカメラに向かって語りかけるように発表できたという成果もあった。

#### 5 おわりに

この10年を振り返ると、生徒に感謝せずにはいられない。「快適な空間を」という生徒の声と献身によって、図書室は明るい憩いの場であり、授業で使える空間になった。また、ビブリオバトルに関しては、岡山や広島で開催される県大会や中国大会に何度も出場し、引率教員の私は発表を楽しみ、経験を積むことができた。最近では瀬戸内市民図書館主催の大会のバトラーや運営ボランティアとして参加する生徒も出始めた。こうした生徒の取組は、地域に温かく受け入れられ、市民図書館では、生徒が紹介した本を「特設展示」したり、邑久高の取組を展示する場を提供してくださっている。そして、



邑久高校にLHRで「代表選出」の時間を設定するなど、教科の枠を超えて読書活動を支援する体制があることに感謝し、誇りに思う今日この頃である。

『タネの未来』小林宙 家の光協会  
『2020年6月30日にまたここで会おう』瀧本哲史 星海社  
『世界でいちばん貧しい大統領からきみへ』くさばよしみ 汐文社  
『人魚の眠る家』東野圭吾 幻冬舎  
『記憶屋1』織守きょうや KADOKAWA/角川ホラー文庫  
『でーれーガールズ』原田マハ 祥伝社  
『鳥に車は似合わない』阿部智里 文藝春秋

## 指導助言一分科会 B

### 『豊かな心を育み，読書の楽しさを味わわせる学校図書館』

指導助言者 岡山県立津山東高等学校 校長 園田 哲郎

今回指導助言のお話をいただき，私が勝山高校に勤務していた時にリニューアルされ，生徒が大変お世話になった真庭市立図書館でみなさんとお目にかかれることをとても楽しみにしていましたが，誌上大会となってしまい少し残念に思っています。しかし，レポートで皆さんの優れた取組に接することができ，自分自身の研修にもなりました。指導助言といえるほどのコメントはできませんが，感想を述べさせていただきます。

瀬戸内市立牛窓北小学校の取組は，「本の福袋」や図書室への作品展示など，なるほどその手があるかと感心させられるアイデアがたくさんありました。読書に親しむ機会を増やすためには，これをやっておけば大丈夫という取組はなく，「一つの工夫で一人の読書好きが増えたら成功」くらいの心持ちで引き出しを増やしていくしかないのかもしれないかもしれません。その分図書館に関わる先生方のご苦労が増えてしまうと思いますが，とてもやりがいのある仕事だとも感じます。また，美咲町立旭小学校の取組で特に印象に残ったのは，中学生による読み聞かせの取組です。これは小学生と中学生の双方に大きなメリットがあるのではと感じました。令和5年に義務教育学校としての開校を目指されているとのことで，新しい学校づくりの核の一つにもなる取組ではと期待を持ちました。

倉敷市立南中学校と東中学校の取組は，生徒がポップや帯を実際に作成するにあたり，言葉の選び方や文字の大きさ，割り付けなどを先生方がていねいに指導されていることがうかがえました。完成度の高いものを作ることが生徒の達成感の高まりにつながっているように思えます。また，振り返りシートを活用されているとのことで，疎かになりがちな評価の部分をきちんとされているところにも感心しました。ブックトークは，ともすれば一方的なものになりがちだと思いますが，「お薦めのシーンはどこですか」といった質問が出やすいような雰囲気が進められているようで，学校ならではの対話的な学びがなされているのではないのでしょうか。まだやりたい，と生徒から要望が出るような活動は理想的だと思います。私も国語の教師ですが，国語科の指導に位置づけて取り組むことで，平素の授業でも応用できるようなさまざまな利点があるのではと推察します。

岡山県立邑久高等学校の取組は，まず「図書室を快適な空間に」という素敵な願いから始まり，学校全体を巻き込んだ図書室改造へと発展しているところが素晴らしいと思いました。空間の大切さの気づきは，生徒の生涯にわたって有益なものになったのではないのでしょうか。図書室改造時の緊急避難的な工夫がサテライト図書館につながったというのも，実践された学校ならではのエピソードですね。また，ビブリオバトルの流れのご説明からは，本に親しむという目的にとどまらず，表現力などさまざまな資質・能力の向上につながる取組であることがうかがえました。原稿を見ずにカメラに語りかけるというのは，私も昨今始業式や終業式の式辞をリモートでカメラに向かって語りかけるのですが，なかなか難しく，コツを教えてもらいに行きたいくらいです。市民図書館で自分の紹介本が特設展示されていることは，生徒も誇らしく思っていることでしょう。

ところで，今回会場になるはずだった真庭市立図書館には，谷崎潤一郎の立派な特設コーナーがあります。谷崎が終戦前後の一時期勝山に疎開していたことに因むものです。私は谷崎研究者の千葉俊二先生（現：早稲田大学名誉教授）のゼミ生であった関係で，千葉先生から，「細雪」下巻の幻想的な蛍狩りの描写は谷崎が今の勝山高校周辺を散策した時の経験に基づくという説が有力であ

ることなどを教えていただきました。そのことを勝山高校の図書館だよりで紹介したところ、生徒の保護者でもある市立図書館員さんがその文を谷崎コーナーに掲示してくださり、恥ずかしい中にもうれしい思いをしました。図書館と関われることは、誰にとっても、いくつになってもうれしいものです。そしてこのことは今回の4つのご発表といくらか共通点があるようにも思います。

今回のご発表はいずれも、活発な読書活動や学校図書館の整備により、児童生徒の豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせることにつながっている、大変すばらしい取組ばかりであったと思います。各校の先生におかれましては、図書委員はじめ児童生徒や同僚の先生方と連携をとっていただき、学校図書館の積極的な活用に向けて中心となって取り組んでいただくことを期待しています。

## 主体的な学びにおける学校図書館活用・司書との連携のあり方

岡山市立御野小学校 教諭 西森 友美

### 1 はじめに

まず、主体的な学びについては、中学校区で次のような子どもの姿を共有している。「進んで本を探している」「(授業の中で獲得した読みを活用して) 同じ視点で読んでいる」「自分の考えを吟味している」姿である。

現状としては、図書の時間に本の返却・貸し出しで使用したり、たまに司書による読み聞かせが行われたりといった程度の図書館活用にとどまっている。また、学習活動に必要な本について用意を依頼する程度の司書との連携にとどまっている。このように、授業とのつながりを考えることなく、司書に任せきりの状態を続けていては、主体的に学ぶ子どもの姿を引き出すことはできない。

そこで、司書と協働で授業デザインを行っていくことで、主体的に学ぶ子どもの姿を引き出すことができるのではないかと考えた。まずは、国語科にしぼった授業づくりによる取組を進めていくこととした。

### 2 具体的な取組

#### (1) 学校図書館活用をめざした取組

学校図書館は、授業と結び付けて考えることで、主体的な学びを引き出す場として活用することができると考え、取組を進めた。

##### ① 授業の導入の場としての活用

###### ア 短歌・俳句への親しみ

「きせつの言葉」「短歌・俳句に親しもう」(光村図書4年)の2つの単元を合わせて授業デザインを行った。導入で、教科書の短歌や俳句いきなり触れると、興味・関心をもつことができないと考え、まずは図書館にある多様な本を読む中で、自分のお気に入りの短歌や俳句を探すという活動を取り入れた。なぜ気に入ったのか、どんな言葉にひかれたのかなど友達と交流することで、季節を表す言葉に注目したり、歌人や俳人の書きぶりに

感動したりするなど、短歌や俳句に興味を示す子どもが多く見られた。その後、短歌や俳句の本を進んで借りたり、季節を表す言葉を入れた俳句を作ったりする子どもが多く見られた。

このことから、授業の導入で図書館にある本に触れる活動を取り入れてから、教科書の短歌や俳句について学習したことで、短歌や俳句に親しみをもって学びを進める子どもの姿を引き出すことができたと考える。

##### イ 図書の分類への気付き

単元は、「図書館へ行こう」(光村図書4年)である。図書館の中を実際に見て歩くことで、本がどのように分類されているのか、なぜそのような分類になっているのかを考えるという授業デザインを行った。図書館で授業を行ったことで、多様な本を手にとって考えたり、話し合いで出てきた気付きについてその場で確かめたりすることができた。また、疑問が生じた場合も、その場で司書に尋ねることができるため、すぐに解決を図ることができた。

このことから、実際に図書館という場を活用しながら授業を進めたことで、図書の分類について経験と知識とを結び付けながら、理解を深めることができたと考える。

##### ② 授業のゴールとしての活用

単元は、「筆者の考えから、自分の考えを広げよう」である。中心教材の『数え方を生みだそう』(東京書籍4年)で、筆者の考えを読み取り、それに対する自分の考えを広げていくという力を身に付け、その力を活用して何冊かの本を読んでいくという授業デザインを行った。ジグソー法を活用して、言葉に対する筆者の考えが書かれた4冊の本を分担して読み取り、それぞれが読み取った筆者の考えを班で共有し、「言葉」に対して筆者たちがどう考えているのかを話し合うという活動を進めた。この授業後に、図書の時間を設定する

と、「言葉」に対する本が他にないかと、進んで関連図書を探す子どもの姿が見られた。

このことから、中心教材をもとに図書館の本を活用した授業を進めることで、関連図書に関心を持ち、本を探す子どもの姿を引き出すことができたと考える。

## (2) 司書との連携をめざした取組

司書は、協働で授業をつくっていく存在であるという視点をもって連携して授業づくりを進めていくことで、主体的に学ぶ子どもの姿を引き出すことができると考え、取組を進めた。

### ① 授業のねらいに沿った本の選定

授業者が単元で身に付けさせたい力、すなわち授業におけるねらいを明確にして、そのねらいを司書と共有することがまず必要であると考え。その上で、ふさわしい本はどれなのかを協働で吟味して選定することで、授業で身に付けた力を図書館の本を活用してより深めることができ、主体的な学びを引き出すことができると考えた。

取組としては、単元「きょうみをもったところを中心に、しょうかいしよう」中心教材『ウナギのなぞを追って』(光村図書4年)と、(1)②で述べた単元における授業である。どちらの単元においても、筆者の考えを読み取り、それに対して自分がどう考えるかを友達と共有することをねらいとしている。このねらいを達成できそうな本がどれなのかを司書と協働で選定した。まずは、教科書に挙げられている参考本を検討し、筆者の考えを読み取ることが難しそうな本は外して、図書館にある他の本を加えた。学校図書館に適切な本がない時には、他の小学校や市・県立図書館の本を検索し、検討を重ねて選定した。その結果、いずれの単元においても、子どもたちが自分で筆者の考えを読み取り、それに対する自分の考えを友達と共有する姿を見ることができた。

このことから、授業のねらいを共有し、その達成をめざした本を選定することで、授業で身に付けた読みの視点を活用した読み方を進めることができたと考える。

### ② 必要な本の収集

授業者と司書が協働で本を選定する際、学校の図書館だけでは十分に本がそろわないという問題が生じることがあった。その際には、他の小学校や、市・県立図書館から収集したり、必要な本を購入したりした。(1)②で述べた、ジグソー法を活用した授業を進める際には、同じ本が何冊も必要となるため、全員に本が行き渡るように、司書が多様な場所から本を収集した。このようにして必要な本を準備して授業をした結果、子どもたちが一斉に本を読むことができ、ねらいの達成をめざした授業を進めることができた。

このことから、司書が他の小学校や図書館とつながり、授業で身に付けさせたい力に合わせて必要な本を収集することで、ねらいの達成をめざすことができたと考える。

## 3 おわりに

まず重要なことは、ねらいを明確にした授業における学校図書館の活用である。ねらいを達成するために、どの場面で学校図書館を活用することが有効なのか、どう授業とつながりをもたせることで、身に付けた力を活用することができるのかといった視点を持ちながら、授業デザインを行い、学校図書館を活用していくことを今後めざしていきたい。

次に重要なことは、その活用において、司書は協働で授業を進めていく存在であるという視点をもつことである。授業におけるねらいを共有した上で、司書にしかできない専門性を生かして本の提案をしたり、必要な本の収集をしたりすることで、授業者とともに、ねらいの達成をめざした授業をつくり上げることができると考える。ただし、大量の本の収集については、司書の手間を考えると、難しい場合もある。そこで、1人1台端末によるデータ活用をすることで、その手間の解消を図り、ねらいの達成を図ることも視野に入れて授業デザインを行っていきたい。

以上のことから、ねらいを明確にして学校図書館を活用したり、司書と連携したりすることで、主体的に学ぶ子どもの姿を十分引き出すことができると考える。今後は、他教科やその他の教育活動における学校図書館活用・司書との連携のあり方についても探していきたい。

## 主体的な学びを生み出す授業づくり ～学校司書と連携した学習を通して～

岡山市立牧石小学校 教諭 山内 祐子  
学校司書 武中 陽子

### 1 はじめに

「心豊かに自ら学ぶ児童の育成」という本校の学校教育目標のもと、図書館教育においては「図書館資料を活用した学習活動を通じて、自ら課題を見つけ、解決できる力を育てる」「読書体験を通して、様々な感情や知識を得ることのよさを児童自ら体感することで、読書の楽しさや喜びを味わえるようにする」「図書館という公共の場での、規範意識を育てる」を目標に掲げ、研究実践を重ねている。

これまでの研究の成果として、日常生活や児童にとって身近な話題の中から取り上げた学習対象に対して、児童一人一人が課題意識をもち、主体的に解決する姿が見られるようになったことが挙げられる。しかし、学習や単元の最後に自分の成長や変容に気付く児童に差が見られ、次時に向かう意欲に課題がみられた。

そこで、本校では、「主体的な学びを生み出す授業づくり～学校司書と連携した学習を通して～」を主題に、研究を進めることにした。研究の視点を①学習過程の工夫（学習意欲を引き出す導入の工夫、知識及び技能を習得するための工夫）②深い学びにつながる指導方法の工夫（思考を促す指導方法の工夫、言語活動の充実を図る指導方法の工夫）③成長への気づきを促す指導方法の工夫（まとめと振り返りの場の設定、評価方法の工夫）とし、国語科を中心に授業実践を行った。

授業者と学校司書が学習内容に関することを相談しながら単元の流れを考えることで、児童にとって図書館が読書活動の場として、また主体的な学びの場として一層身近な存在になることをねらった。

### 2 具体的な取組

単元名 すきなところを見つけよう

（中心学習材）「スイミー」（東京書籍 1 年下）

#### （1） 単元について

中心教材「スイミー」は、絵本「スイミー」を教材化したもので、情景やスイミーの気持ちの変化が時間軸に沿って簡潔な文章と色彩豊かな絵で描かれている。話の展開のおもしろさを味わい、物語の構成に気付くことができる。この単元では、「スイミー」の教材を学習することを通して、つけた力を使って、児童が自ら絵本を選び、絵本を読むおもしろさを味わったり、他のレオ＝レオニの作品についても、読書をするおもしろさを味わわせることで、日常の読書につないだりできることを目指した。

#### （2） 単元目標

- ・身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うことを通して語彙を豊かにすることができる。
- ・同じ作者の絵本の題名や表紙に目を向ける活動を通して、本を選ぶ方法を知ることができる。 【知識及び技能】
- ・スイミーの行動や会話をもとに、気持ちや様子を想像しながら読むことができる。 【思考力・判断力・表現力】
- ・図書館で絵本の作者、題名や表紙などから本を選んだり、絵本の絵や言葉から想像して読んだりして、本に親しみ、いろいろな本を読もうとする。

【学びに向かう力・人間性等】

#### （3） 授業の実際（全 11 時間）

##### ① 第 1 次（2 時間）

- ・導入に大型絵本「スイミー」の読み聞かせをすることで、絵本の題名や表紙に目を向けさせ、絵本を読みたくなる気持ちを喚起できるようにした。
- ・絵と文章から絵本「スイミー」の世界を

楽しませ、第2次からより深く読んでいくためのめあてをもたせた。

## ② 第2次（6時間）

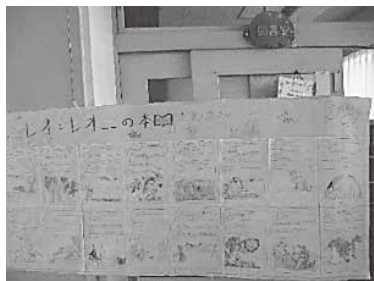
- ・スイミーの気持ちや様子を場面ごとに読み取り、事件が起こってから解決していくまでの流れをつかむことで、話の展開のおもしろさに気付かせた。

## ③ 第3次（3時間）

- ・「スイミー」と同じ作者、同じ展開の作品を3作品用意し、題名や表紙から絵本を選ぶこと、心が動いたおもしろいところ（お気に入り）を見つけることを視点として読む活動を取り入れた。



- ・自分が選んだ本のおもしろいところを紹介カードに書き、図書館に掲示することで全校児童にレオ＝レオニの作品の良さを伝えることができたようにした。



## ④ 課外

- ・学校司書が、図書の時間に行う読み聞かせの際には「スイミー」のように起承転結がある、違う作者の絵本を用意し、違う展開のおもしろさを感じられるようにした。
- ・図書館に「スイミー」の作者である、レオ＝レオニの作品のコーナーを設け、児童が自由に読めるようにした。教室にも同じ本を用意し、いつでも手にとることができ、友達と思いや考えを共有できるようにした。

## （4）授業を終えて

「スイミー」で学習したことを活かして、題名や表紙をもとにいろいろな本への興味をも

てるような授業を行うことで、児童たちが読書の楽しさを感じたり、読書の幅を広げたりする姿が見られた。また、自分が読んだ本の良さを友達に伝えるためにじっくり本と向き合い、言葉を選んで文や絵をかくことで、読書の質が深化した。本単元の学習が終わった後も、絵本に進んで親しむ児童が多くみられた。本との出会いの工夫も大切だ。

読書が好きな児童は、想像しながら読んだり、展開のおもしろさに気付いたり読書の楽しさをよく知っている。しかし、読書があまり好きではない児童は、学校司書や担任による読み聞かせによって、話の楽しさが伝わり、自分でも借りて読んでみようと思うことがある。どの児童もわくわくするような内容である選書、読み聞かせの大切さを感じた。

今回は1年生の実践だったが、各学年の国語の教科書には、該当学年の児童に合った本を紹介している内容紙面が載っている。学年が上がるごとに内容が難しいものになっていくが、今回のように1年生から丁寧に読書の楽しさを味わえるような授業を行うことが、次の学年での読書意欲へつながっていくと感じた。また、読書の楽しさを感じる児童に育てることで、文章に主体的に向き合い、内容を読解する力も身につけさせていくことができるのではないかと考える。

今後は、各学年で「読むこと」に関する内容について学校司書と連携した授業づくりの体制を一層整えていくことが課題である。

## 3 おわりに

今回の実践を通して、児童が目を輝かせながら本に向かう姿をたくさん見ることができ、改めて学校司書と連携した授業の効果や図書の時間の大切さを感じた。読み聞かせを始める前に自分がどの場面が好きかを考えながら聞くよう児童に問いかけ、更に、児童が本の良さを友達に自ら伝えるという流れが国語の「読むこと」に関する主体的な学びの力につながる。今後も、学校司書と必要な資料を効果的に活用できるよう事前に話し合い、連携を深めながら、さらなる充実を探っていきたい。



## 主体的に学び合う授業を支える学校図書館

岡山市立岡北中学校 指導教諭 利守 雅行  
学校司書 羽原 祐子

### 1 はじめに

岡山市立岡北中学校では「主体的に学び合う授業を支える学校図書館」を研究テーマとして令和2年度を中心に様々な教科、領域において授業実践に取り組んできた。

授業実践においては、学校図書館の機能である情報の収集、選択、活用能力を育てる活動を取り入れ、生徒が自分の考えをまとめ、表現する主体的な学習や学び合いを支援する授業を進めていくことについて教職員で共通理解した。

### 2 具体的な取組

#### (1) 授業実践1 国語科「鑑賞文(第1学年)」 (図書館使用3時間)

本実践では図書館で調べたことを整理し、根拠を明確にした鑑賞文を書き、それを読み合い、助言し合うことを通して、自分の文章についてよい点や改善点を見出すことをねらいとした。

##### 【授業の流れ】

- ① 鑑賞するということや鑑賞の4つのポイント、鑑賞文を書く手順について学習した。また、教科書に掲載されている鑑賞文の例を使って鑑賞のポイントが文章の中でどう生かされているかについて確認した。
- ② 図書館の資料(公共図書館から80冊借受)の中から興味をもった芸術作品について、4つの鑑賞のポイント「作品全体から受けた印象」「どんな場面、何が起こっているのか」「作品のしくみや技法の分析、表現の工夫や特徴」「作者の思い、伝えたかったこと」にそって調べる活動に取り組んだ。

学校司書と事前に打ち合わせを行い、この授業では取り上げる芸術作品を「絵画、彫刻、建築物」の3分野に絞り込み、資料を準備した。調べたことをレポートにまとめる活動の前に、資料案内、調べ方、関連本の紹介、出典の書き方などについて学校

司書が説明を行った。

- ③ レポートにまとめたものを材料にして、鑑賞文を書く活動に取り組んだ。作成にあたって、調べた事柄を鑑賞の根拠として明確に表すことに重点をおいた。根拠の意味を押さえたり、既習の三角ロジックの内容を再確認したりして取り組んだ。
- ④ 書き上げた鑑賞文をグループで読み合い、読み手がよい点や根拠をより明確にするためのアドバイスを記述した。生徒のアドバイスには、「文章の構成がわかりやすい。」「問いかけの表現がおもしろい。」「説明が詳しくてよい。」「自分の感想や考えをもう少し入れたほうがいい。」「大切な言葉を繰り返しているところがいい。」「作者の説明より、鑑賞した絵の説明が多い方が分かりやすい。」等があった。

読み手も他者の鑑賞文から自分とは違う見方を学び、また書き手もアドバイスをもらい自身の文章を見つめ直すなど、学び合いの姿があった。自分が興味をもった題材で取り組み、書いた鑑賞文であるので、意見の交流がより深められるものになったと思う。

- ⑤ 最後に、書かれてある助言をもとに自分の鑑賞文のよい点、改善点を検討し、それらを取り入れながら鑑賞文を清書した。そこには、他者の意見や考えに進んで関わり、問題点や情報の共有などを通して一緒に新しい知識を得る学びがあったと思う。

##### 【授業を終えて】

興味をもった芸術作品について調べることで意欲をもってスタートし、鑑賞文を書くというゴールに向けて、見通しをもちながら自ら学んでいく活動となった。

- (2) 授業実践2 国語科「俳句の世界／俳句十句(第3学年)」(図書館使用10時間)  
本実践では自力での俳句鑑賞、鑑賞の観

点を踏まえた俳句の創作に取り組んだ。

#### 【授業の流れ】

- ① 国語の教科書に掲載されている俳句から1句を選び、表現上の工夫や作品の解釈に注意しながら、「印象に残ったこと、五感(視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚)、誰と誰が、いつ、どこで、どのような様子、季語(季節)表現方法」等について自分の言葉でまとめ、その内容をもとに鑑賞文を書く。
- ② 同じ俳句を選んだ生徒同士で鑑賞文を読み比べる。次に図書館の資料(公共図書館や他校から56冊借受)にある鑑賞文と自分の鑑賞文を比べ、参考になった所や新たな発見があった点を見つける。その際、学校司書が関連本の紹介、調べ方の説明を行う。
- ③ 分析した観点を参考にして俳句を創作する。工夫した点やアピールポイント、鑑賞文も書く。
- ④ 創作した俳句で、班対抗の俳句甲子園を行う。(今回は4人班のうち一句を選び対戦)  
・対戦例「一窓にたわむれる子の曇かな」  
「祖父の庭せのびしほおぼるゆすらうめ」

#### 【授業を終えて】

教科書掲載の俳句を鑑賞する際、生徒自身が考えた鑑賞文と図書館の資料に載っている鑑賞文を比較することで視点の違いに気づく。それが主体的な学びにつながっていくのではないかと。さらに、俳句を創作する場面では歳時記(公共図書館から80冊借受)が役に立った。

また、俳句の創作は個人の作業だが、周りの生徒とお互いの作品を比較しながら、「この季語はどうか。」「この表現方法を使ってみてはどうか。」と、自然発生的な学び合いが生まれていた。生徒も、「図書館の資料やクラスの人が考えた俳句の鑑賞文を読み合うことで、違った見方を知ることができおもしろかった。」と感想をまとめた。

- (3) 授業実践3 英語科「My Favorite Words 心にひびくことば(第3学年)」(図書館使用1時間)

本実践では自分の気に入った言葉を見つけ、それを英語で表現することをめざした。

#### 【授業の流れ】

- ① 図書館の資料から、自分の気に入った言

葉を探す。

- ② 「いつ、どこで、誰が言った言葉か、その人はどんな人か、なぜその言葉が好きなのか」等を英語でまとめる。

#### 【授業を終えて】

限られた時間の中であつたが、生徒たちは自分の好きな言葉を見つけることはできていた。しかし、英語で説明するという点についてはスローラーナーには厳しい場面もあった。

格言、名言を言った人の特徴を調べる際には、事前に準備した本(公共図書館から25冊借受)以外の図書館の資料を使用する生徒もいた。その際、学校司書は「こんなものもあるよ。」と参考になる本を紹介した。生徒は自分の求める(好みに合った)本を紹介されることで、英語の苦手な生徒も含め、進んでライティングや情報収集に取り組んでいた。

図書館の資料には、格言と合わせてエピソードやわかりやすく英訳が載っているものもあり、英語が苦手な生徒も参考にしながらか主体的に学ぼうとする姿が見られた。

- (4) その他の授業実践

家庭科「絵本づくり(第2学年)」、国語科「新聞記事の読み比べ(第3学年)」、社会科と国語科の合科「SDGs新聞の作成(第3学年)」なども学校図書館を活用して授業実践を行った。

### 3 終わりに

主体的な学びにおいては、生徒自らが学ぶ気持ちになること(学ぼうとする意欲や学びの見通しをもつこと)、そして学んだことの中から自分の意見を確立することが大切であると考えます。また、自分の意見を持つことは他者との学び合いにおいても重要になる。

このような学習を行うためには、学校図書館の幅広く多様な資料の活用、授業内容や生徒の学習状況を把握し、関連資料を的確に提供する学校司書の役割が必要である。そして、授業者との綿密な連携も欠かせないと思った。

今後は探究的な学びについても視野に入れながら、学校図書館の機能を活用した魅力ある授業づくりに取り組んでいきたい。

## 興味を広げる図書館 ～いろいろな工夫～

津山市立北陵中学校 教諭 市村 舞子

### 1 はじめに

本校は津山の中心市街地東部から北部にかけ、南北に細長い半扇形の地域を学区としており、学級数 21 学級、生徒数 612 人の学校である。

「豊かな人間性を培い、主体的、創造的に自己実現をめざす、心身ともにたくましい生徒を育てる」という学校教育目標のもと、研究主題を「自己実現をめざす生徒の育成」と設定し、生徒一人ひとりの自己実現のために必要な基礎的・汎用的な能力の育成をめざしている。

生徒は、全体的に落ち着いて学習に取り組んでおり、生徒会活動や部活動にも積極的に取り組むことができている。しかし、語彙力不足から自分の考えを文章で表現するなどコミュニケーションが苦手な生徒や、長文の読解を苦手とする生徒も多い。そこで、生徒同士が教え合える、学び合える機会を積極的に設けている。例えば体育祭のブロック制度、学年を跨いだ縦割りの教え合い学習、近隣の高校生とも連携を図り、放課後に先輩から教えてもらえる補充教室などがある。同学年の横の繋がりでだけでなく、先輩と後輩の縦の繋がりができる機会となっている。また、研究指定を受けたNIEを活用しながら、各教科での学習が実生活と結びつくよう工夫している。

本校の図書館は学校司書が常駐しており、毎休み時間、放課後に開館している。平成 30 年度に漸く貸出しや蔵書のコンピュータ管理ができるようになった。生徒たちは本の貸出しは勿論、読書のためや自主勉強のために利用している。昨年度の貸出し総冊数は 9,226 冊で、1 日平均 50 冊ほどである。

### 2 具体的な取組

#### (1) 委員会

委員会の活動は月に一度の専門委員会をふまえ、内容を決めている。

#### ① 朝読書チェック

週に一度(金曜日)朝読書にきちんと取り組んでいるかをチェックし、担任、学年の委員会担当の先生に表を提出している。内容は、「時間通りに始めているか」「本を準備し読書できているか」「別のことをしていないか」などがある。3年生は朝学習に取り組んでいるので、学習ができているかをチェックする。朝学習が早くすんだ生徒は朝読書をしている。

また、各クラスに図書館から貸出している学級文庫があるので、その管理も併せてしている。

#### ② 図書館のカウンター当番

昼休みに、カウンターの仕事を学校司書に代わって行っている。前期は3年生が担当し、後期は2年生が引き継ぐ。貸出しの作業や、返却本の整理などを行う。

#### ③ 学年ごとの企画

学年ごとに文化委員が工夫を凝らし、読書や図書館利用へ、興味を持ってもらう企画を考えている。ポスターや新聞の作成だけでなく、各学年で「本を読もうキャンペーン」などを行い、各クラスが競うことで、参加意識を高める。昨年度まで前期・後期、各学年1回ずつ企画を行っていたが、今年度は読書週間(年2回6月・11月)などを利用して全校での企画も予定している。

#### (2) 授業

R2年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、なかなか実施が難しかったが、何度か授業で図書館や図書の本を利用し、調べ学習などをすることができた。

1年生では、お勧めの本のPOPの作成や、職業調べを行い、3年生では国語で学習した論語の中から自分の好きな言葉を探した。

職業調べや論語を調べる際、学校司書に手配を頼み、近隣の図書館から関係図書を借り

た。職業や、論語に関する本は1人に2冊ほど集めることができ、自分で選択する幅が広がり、生徒たちも積極的に本選びをしていた。

授業で図書館を使用することによって、いつもは図書館に向かわない生徒も本を借りたり、読んだりしており、図書館利用に興味があったようである。

### (3) その他の取組

昨年度、一昨年度とNIEの研究指定を受け、生徒たちに新聞への関心を持ってもらう機会を設けてきた。情報活用能力及び思考力・判断力・表現力等の育成を目指すとともに、学びを実社会や実生活につなげていくことを目的としてNIEの実践に取り組んでいる。

最近では新聞を購読している家庭が半数ほどになっており、新聞離れが感じられる。新聞を利用した授業を行ったり、校内でも新聞の記事を掲示したりすることにより、図書館に来た際、新聞を手に入る機会としている。

また、図書館独自の読書スタンプカードを作った。貸出しの際にスタンプを押し、18スタンプでしおりなどのプレゼントが貰える。特に図書館をよく利用している生徒に好評だった。

## 3 おわりに

R2年度は、前年度まで行っていた少年・少女漫画の貸出しを止めたことで、全体的な貸出総数は減少したが、他分類の貸出数が伸びた。科学漫画や歴史漫画は引き続き貸出し、ドラえもん社会・科学ワールドシリーズなど、中学生が読みやすい本を増やすことで貸出数が増加した。

### (1) 読書アンケートより

昨年度の2学期、全校生徒に読書アンケートを実施した。結果を見てみると、図書館を利用する生徒は全体の6割ほどと決して多くはなく、1ヶ月の読書量も全体の4分の1は1冊も読み終えることができないと回答している。また、読書が嫌いだと回答した生徒も全体の4分の1いる。しかし、読書は必要だと感じている生徒は8割と多い。

アンケートを行うことにより、生徒の読書の実態を知ることができた。アンケート結果は教室にも掲示し、生徒たちも意識することができた。また生徒たちの好きなジャンルの

本もわかったので、選書の参考にしたい。アンケートは毎年行い、図書館を利用しない生徒に理由を尋ねるなど、今後の図書館運営に活かしていきたい。

### (2) 成果と課題

R2年度は4月、5月に休校があったために、毎年行っている年度始めの図書館オリエンテーションが行えない学年があった。朝読書もなく、図書館利用や読書から離れてしまった生徒もいると感じた。そのような中で、図書館の館内整理を積極的に行い、古い本を廃棄した。学級文庫もそうだが、本が古く、分厚いものが多いと難しそうだと手に取らない生徒が多い。読書が苦手な生徒も手に取りやすいよう、中学生向けの本を増やした。また、本の購入希望にはできる限り応え、津山市立図書館や岡山県立図書館などからも借りて貸出しするようにした。加えて、図書館展示の工夫として、机上の展示を増やした。表紙が見えることで興味がわき、普段は手に取られない本でも、図書館内で読んだり、借りられたりすることが増えた。一昨年度より新たに始めた、委員会のカウンター当番のおかげで、学校司書が生徒からの質問や相談を受けやすくなり、生徒との会話から中学生の流行り、興味あるもの、どんな本を読みたいかを知ることができた。全体として、落ち着いた利用ができたので、休み時間など1年生も利用しやすかったのではないだろうか。

今年度は、委員会だけでなく、図書館イベントとして前年度人気だった読書スタンプ集めも引き続き実施したい。クラス内での連絡だけでは実際に図書館まで足が向かない生徒もいるので、授業での利用や校内にポスターを貼るなど図書館のPRもしていく。

現在図書館には新聞4紙が入っているが、読む生徒は少ない。新聞の活用を増やすため、昨年度は文化新聞で紹介した。今年度も委員会での企画に組み込んでいきたい。

生徒一人ひとりの自己実現のために必要な知識や経験は、様々な場面で得ることができる。図書館もその一端を担っており、いろいろな分野や世界に興味を持つ、初めの一歩にもなるが、まずは図書館に来てもらうことが必要である。そのために、様々な工夫を凝らし、図書館利用の機会につなげたい。

## ニーズに応える学校図書館づくり～倉敷中央高校の取り組み～

岡山県立倉敷中央高等学校 司書 古賀 美佳子

### 1 はじめに

本校には、普通科（類型・子どもコース・健康スポーツコース）、家政科、看護科、福祉科の4科と看護専攻科がある。昨年度から普通科が1クラス減となり、今年度は1年と2年が7クラス、3年8クラス、専攻科2クラスの計24クラス、933名が在籍している。共学ではあるが、男子は少なく、今年度入学者は2名、全校あわせて13名である。

図書館は中央棟4階にあるが、昼休みや放課後だけでなく、休み時間にも図書館を利用する生徒は多い。特に利用が多いのは課題研究の資料を利用する看護科・専攻科と日頃部活動で頑張っている健康スポーツコースの生徒である。

### 2 課題

赴任してきた当初、生徒の利用はそれなりにあるものの、貸出ジャンルはケータイ小説やコミックが大半であった。また、教職員の利用は少なかった。図書室内に季節や時事に応じたミニ展示コーナーを設置してみたがあまり反応はなかった。一方で「何かおもしろい本がないですか？」という質問はよく受けていたので、まずは、教職員、生徒ともにニーズを把握することが必要だと感じた。さらに情報発信することで、図書館をもっと身近に感じてもらい、利用の必要性を周知しようと考えた。

### 3 具体的な取組

#### (1) 生徒に対して

##### ① 情報収集

本校図書館は1棟と2棟をつなぐ中央棟と呼ばれる場所に位置しているので、教室移動等で図書館を通り抜ける生徒も多い。その生徒たちに声をかけ雑談をすることで、今関心をもっていること、必要としていることなどを情報収集した。

##### ② 1年生への利用案内

本校では1年生の図書館オリエンテーションを実質2回行っている。まず4月初めの校内見学で、5分程度の短時間ではあるが、利用案内を配るとともに簡単なオリエンテーションを行ってさまざまなジャンルの本を紹介

する。次に6月の国語総合（現代文）の授業時間にワークシートを使って図書館を実際に使ってみてもらう。進路、興味・関心のあることをキーワードとして挙げ、それについて図書館の図書・雑誌・インターネットの情報を使って調べるという作業を行わせた。

##### ③ 2年生への利用案内

昨年度はコロナ感染症の影響を受けて6月のオリエンテーションは時間を短縮して行ったうえ、1クラスは実施できなかった。そのせいか1年生の利用だけが例年の半分ほどと伸び悩んだので、今年度は2年生でもオリエンテーションを実施することにした。

##### ④ 看護科へのアプローチ

看護科・専攻科の生徒の図書館利用率は非常に高い。学年が上がるにつれて利用は増える。

専攻科1年「看護研究」の授業では司書が蔵書検索のコツ、データベースの使い方などを説明したあと、個々のテーマに沿って図書館で文献を探す授業を実施している。授業時間の後も必要に応じて生徒は図書館を利用する。最初の年は1月に1時間をとっての授業であったが、翌年からは少し時期を早めて12月に実施、授業の時間も2時間連続となった。今年度は早めに文献調査を始めることでテーマについてより深く考えられるようにと教員と打合せをし、5月に2時間で実施した。

#### (2) 教職員に対して

##### ① 雑談からの情報収集

教職員のニーズの把握をしようと思っても、あらたまって話をする時間をとることは難しい。そのため、機会を見つけては立ち話で授業内容などについて聞きとりをした。また、県立図書館の搬送便で本の取り寄せができること、個人で借りた本も学校から返却できることをPRした。実際に取り寄せをして提供することで、その後の利用につながっている。県立図書館から取り寄せた本を教員からの要望により自校で購入することもある。

授業の参考に用意したものは職員室へ届けている。そこで図書館を利用しての授業の計画が持ち上がることもある。打合せしている

のを聞いたほかの教員から図書館の利用について関心を持ってもらえることもある。

## ② 教職員向け利用案内の配布

シラバス作成時期にあわせて利用案内をすれば、授業計画の中に図書館の利用を入れてもらえると考えた。そこで4月の始業式前のできるだけ早い時期に教職員向け利用案内を配り、図書館の案内をした。

## 4 成果と課題

### 【成果】

#### (1) 生徒主体の利用

図書館を使っただけの授業をきっかけに利用するようになる生徒、教員から紹介された本を探しに来る生徒、教員に図書館の利用を勧められて来る生徒が増えている。

##### ① 進路実現

総合的な探究の時間でキャリアについて考えるため、職業や資格について調べに来る生徒が増えている。受験対策として小論文のテーマや書き方について質問されることも多い。そこで、進路・小論文コーナーを設置し、一覧できるようにした。また、生徒の興味・関心の傾向について教員から情報を得て選書の参考にしている。

##### ② 興味・関心・問題解決

部活動、趣味の参考に図書館を利用する生徒も増えた。運動部の生徒がトレーニング方法やケガ予防の本を探す、書道部の生徒が題材を探す、自分で演奏したいから楽譜がほしいなど、さまざまな要望がある。家で食事のしたくをする生徒が家族のための献立の本を探す、など図書館の本を利用して課題解決のヒントとすることに気づくこともある。

通り抜けの途中での雑談から本の紹介に至ることも多い。通り抜けの途中に見てもらえるよう、カウンター横にテーマや期間は特に設けず随時入れ替えるミニ展示コーナーを設置している。展示を見ながらの生徒の会話も選書のヒントになることがある。

#### (2) 授業での図書館利用

##### ① 美術

図書館を使って作品製作の素材集めをしている。動物の木彫製作のための三面図作成、油絵の構想、郷土カルタ製作のための地元調べ、デザインの授業では駄菓子のパッケージの特徴を調べて自分でデザインする。図鑑や写真集などの図書やインターネットの情報を使った授業が行われた。

##### ② 国語表現（普通科3年）

ビブリオバトルのための本選びが行われた。最初に司書がブックトークで生徒が普段手に取らないような本を紹介し、そのあと、個々に本を選んだ。

図書館に集まった授業以外にも、教員と打合せをして用意した図書を教室で使う授業や授業内容に即した資料を図書館で予め用意して、授業の後で生徒が個々に探しにくるといった利用の形もできた。

専攻科の看護研究のように図書館を使用することを前提とした授業もあれば、教材研究のための資料の相談から授業そのものを図書館で実施する、あるいは生徒が利用できる図書も用意する方向に話が進むこともある。

授業の中に図書館を組み込んでいくためには司書と教員とで情報共有が必要なため、年5回発行しているライブラリーニュースは生徒用に加えて教職員版を作成している。

### 【今後の課題】

令和の学びの「スタンダード」となるGIGAスクール構想の実現に向けて、図書館にもWi-Fi環境が整った。今後、生徒が1人1端末を所持するようになるので、図書館でも文献調査のレクチャーなどが実施しやすくなる。図書館でのICT活用の方法を検討していきたい。

## 5 おわりに

本校の図書室の座席は1クラス(40人)が辛うじて収まる数しかなく、授業での利用にはかなり手狭である。一方、通路として利用されるため人の出入りは多い。そのため、物理的にも心理的にも風通しがよいという利点もある。

昨年度は休校期間があったため生徒の利用は少なかったが、一方で教職員の利用は増え、教材研究・生徒指導の参考になる本や自己研修、ストレス解消のための本がよく利用された。

図書館を利用する教員のことを意外と生徒はよく見ており、教員の利用する図書に大いに興味をもっている。教職員の利用が増えるにしたがって、生徒の利用も増え、その目的は進路、部活、授業と多岐に渡っている。

今年度は昨年の反動か、4月当初より授業で図書館が使われている。1, 2年生の利用はまだ活発とまではいえないが、昨年と比べるとかなり増え、3年生は例年以上に意欲的に図書館を利用している。

今後も利用者とのコミュニケーションを密にして、ニーズに応える図書館づくりをめざしたい。

## 指導助言一分科会C

### 『主体的に学ぶ力を育てる学校図書館』

指導助言者 倉敷市立玉島高等学校 校長 辻田 詔子

分科会Cは、「主体的に学ぶ力を育てる学校図書館」をテーマとしています。新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学校図書館の効果的な活用について、特に「主体的な学び」を中心に考える分科会となっています。

「主体的な学び」については、「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業」や「見通しを持って、粘り強く取り組む力が身に付く授業」が期待されています。知の拠点とも言える学校図書館は、授業での活用はもちろんのこと、授業外でも、興味・関心を引き出し、課題意識を持って主体的に学び続ける力を育成する上で、重要な役割を担っていると言えます。

さて、この分科会テーマに沿って、「主体的な学び」を引き出す創意工夫された実践が5校から寄せられました。5校の先生方に感謝申し上げます。資料にはそれぞれ取組の詳細や、成果と課題が簡潔にまとめられており、改めて敬意を表したいと思います。ここでは、各実践において特に印象に残った内容について触れさせていただき、講評とさせていただきたいと思います。

岡山市立御野小学校の取組は、授業者と学校司書がねらいを共有し、効果的な場面を選んで学校図書館を活用することにより児童の主体性を引き出した実践です。ねらいに応じて、授業の導入段階や終末段階で学校図書館を活用した実践例がそれぞれ示されており、授業者と学校司書が綿密な計画のもと選書を行い、必要な図書を公共図書館等から収集して授業が展開されています。授業では、友人同士の意見の交流も積極的に行われており、それにより異なる作品世界にも興味関心を広げられているという効果も生まれています。

岡山市立牧石小学校の取組は、授業者と学校司書が協働し、「読書の楽しさ」を伝えることを通して主体的な学びを目指した実践です。「スイミー」を教材として、「絵本を読みたくなる気持ち」を喚起できるよう、大型絵本を用いたり児童が面白いと思った点を紹介カードにさせたりして、豊かな言語活動を展開しています。読書経験の少ない児童に「本と出会わせる工夫」を行い、成果を次の学年の読書意欲につなげたいとの思いは、読書習慣の形成の点からも重要な意味を持つものとなっています。

岡山市立岡北中学校の取組は、様々な教科で学校図書館を利活用し、生徒が自分の考えをまとめ表現する授業に取り組んだ実践です。学校司書との連携により、公共図書館や他校など外部から豊富な資料を集めたり生徒の様子を見ながら本を紹介したりして、一人一人の興味を引き出すことができています。どの取組も興味をもとに情報を収集、選択、そして活用するという学習活動が展開されており、自らの考えを持つというねらいの達成とともに、学びの一つのスキルを身に付ける機会となっています。

津山市立北陵中学校の取組は、「自己実現を目指す生徒の育成」を研究主題とした、授業、委員会、朝の読書、学年企画など、幅広い実践です。背景には、実践者や学校司書の丁寧なニーズの把握があります。全校生徒への読書アンケートを実施して状況の把握に努め、その結果を教室に掲示したり選書の参考にしたりして活用しています。また、学校司書がカウンター当番の生徒との会話から興味関心をキャッチするなど常にアンテナを高くし、生徒の図書館に向かう気持ちを後押しすることができています。

岡山県立倉敷中央高校の取組は、司書が生徒と教職員に働きかけを行い、図書館の利用を活発化させた実践です。生徒の興味・関心の幅を広げるため、ミニ展示コーナーの設置や図書館の利用指導等を行うとともに、教職員の利用の少なさに注目し資料の取り寄せ方や教職員版ライブラリーニュースを発刊する等して情報提供（研修とも言える）に努めています。これが教職員だけでなく、生徒の利用増加にもつながり、司書・教職員・生徒の動きが結びつき読書機会が作られた点は成果だと言えます。

寄せられた実践は、いずれも身に付けさせたい力を明確にし、授業者と学校司書がそれぞれの専門性を生かし、協働して取り組まれたものばかりです。そのことにより、授業の幅が広がり、豊かなものとなっています。また、児童生徒の興味・関心を大切にしながら、気に入った作品や自分の考えを他の人に伝えるという学習活動が取り入れられている点も、主体的な学びにおいて効果的だと言えます。取り入れた知識を再構成してアウトプットする学習活動の過程において、活発に思考が働くからです。実践者のしかけが、「知りたい」「読みたい」「伝えたい」という思い、主体性を引き出していると感じます。

一方、「読書習慣」同様、「主体的な学び」は発達段階に応じて積み上げられていくことが期待されます。高校生の不読率（55.3% 第65回学校読書調査2019による）は依然として高止まりしています。その理由として、①中学生までの読書習慣の形成が不十分である、②高校生になり読書の関心度が低くなった、③スマートフォンの普及などによる読書環境の変化、などが挙げられています。今回紹介された実践などにより、学校図書館の利用をきっかけとして読書意欲が高まり、読書により学習基盤が一層形成されることが望めます。今後、新学習指導要領のもと、発達段階ごとの取組が系統性や連続性をもって行われ、読書意欲、読書習慣が形成されるよう、各段階での取組の推進をお願いいたします。

最後になりましたが、5校の実践を参考にいただき、皆様の学校での取組が一層推進されますことをご期待申し上げ、私からの講評とさせていただきます。



教師と子ども 子どもと子どもの心をつなぐ  
～「繰り返し絵本」「参加型絵本」の読み聞かせを通して～

岡山市立豊小学校 教諭 酒本 薫

### 1 はじめに

本学級は1年生、男児18名、女児17名計35名の少し幼さの残る明るい学級である。1学期は、コロナウイルス感染症に伴う休校で、学校生活に慣れる時間や、授業時間が十分に取れない状況であった。図書時間も、密になってしまふことを懸念して、貸し借りのみでおこなってきた。読み聞かせをする時間も十分に取れなかったが、教室の中で何度か行った。数冊読んで中でも、「繰り返し」が出てくるお話を好み、集中して聞いたり、読み聞かせをしてもらった後に何人もの児童が自分で借りたりする姿が見られた。そこで、コロナ禍で触れ合えない状況でも絵本を通して友達と関わっている感覚がもてる「参加型絵本」、子どもたちの好きな「繰り返し絵本」の読み聞かせを通して子どもと子ども、子どもと教師の心をつないでいけたらと思ひ、本研究に取り組むことにした。

### 2 具体的な取組

下校前、授業が早く終わったときなどの隙間の時間を使って、ご褒美的に読み聞かせを行っていった。教師の周りに集まるのではなく、教室の中で自分の席に座ったままで読み聞かせた。読み聞かせの後は、しばらくの間教室の後ろにその絵本を置き、自分の好きなときに手に取って読めるようにした。

### 3 絵本の実践

参加型絵本… ㊦ 繰り返し絵本… ㊧

㊧『ちゃんとたべなさい』

出版社：小峰書房

作：ケス・グレイ

絵：ニック・シャラット

豆を食べたくないデイジーと母親との攻防

戦。豆を食べさせるために母親があれこれ提案していく。提案内容が突拍子もなく面白いはもちろん、母の提案に対して何度も「おめでとうだいきらい」と言い返すデイジーの様子が面白く、大笑いしていた。繰り返しに合わせてデイジーの顔が少しずつ大きくなったり文字の大きさが大きくなっていったりするのも視覚的に楽しめるようであった。読み聞かせ後は、絵本を回して読んだり、順番に借りたりする姿が見られ、読み聞かせを通じた実際のつながりを感じることができた。また、デイジーの他の絵本を見つけて読む子ども、デイジーの文庫本版を見つけて借りる子どもの姿も見られ、本と子どものつながりも感じることもできた。

㊦『くまくん』

出版社：ひかりのくに

作：二宮 由紀子

絵：あべ 弘士

“くまくん”が逆立ちをして“まくくん”になるところからお話は始まる。“まくくん”にであった動物たち(りす、とら、かば、やまあらし)が逆立ちをして、名前がひっくり返るといふお話。こどもたちは逆立ちをした“まくくん”を微笑ましく見ていた。りすの場面ではなるほどと感心し、とらの場面では一緒に考え、かばの場面では「言ったらいけないやつだ!」と小声で言いながらも“ばかくん”に大笑いしていた。やまあらしの場面では「これはむずかしい。」と言いながら頭をひねり、考えていた。読後は、自分の名前をさかさまにしてみる児童が多くいた。友達と言っている児童がいたので、名前で遊ぶことにつながってしまわないか不安視したが、伝えあってふふふっと笑う程度だったので、微笑ましかった。

③ ③ 『どっしーん！』

出版社：大日本図書  
文・絵：岩田 明子

急いで走ってきた動物たちが「どっしーん！」とぶつかって、体が合体してしまうお話。「どっしーん！」とぶつかる場面が出てくるたびに子どもたちも読み手に合わせて「どっしーん！」と叫び、合体したおかしな姿に大笑いしていた。最後に蜂に「ぶすっ！」と刺される場面では、どうなるんだろうと息をのんで絵本に見入っていた。もとの姿に戻った動物たちに安心した表情を浮かべる子どももいた。

③ ③ 『あいうえおりょうりめしあがれ』

出版社：イースト・プレス

著：accototo ふくだとしお+あきこ

ばらばらになったひらがなを入れ替えて、料理名を作っていくお話。例えば「すんこーぷー」を使って「こーんすーぷ」を作る。答えを言いたい子どもと答えを聞きたい子どもがいた。嬉しくてついつい答えを叫ぶ子どもに「答え言わないで！」と必死に頼む子ども。「さいごになりましたが…」の言葉に「最後は絶対言わないでね！」と釘を刺されクラスがシーンとなった。「るすみいくあ」から「みるくあいす」。さらに、「くるみあいす」に変身し、最後には全員が「おいしそーう。」とほほを緩めていた。たった一人「よくわからなかったな。」と言っていた子どもがいた。彼女はひらがなを覚えきっていないため、本書の面白さを実感することができなかったのだと思う。

③ 『たべものやさんしりとりたいかいさいします』

出版社：白泉社

作：シゲタ サヤカ

題名通りのお話。お店対抗でしりとりをしていく。「ん」がつく食べ物が出てくると子どもたちは大焦り。「ん」が出てくると「ピピピピー！」という笛の音とともに注意をされる。2回目の「ん」のときには教師が読むよりも前に「ピピピピー！」と子どもの方から聞こえてきた。「ん」がつくたべものたちが帰らされ、仲間が減ったパン屋とラーメン屋の様子を見た子どもたちの中から「かわいそう・・・」という声も聞こえ

てきた。しりとりが続くページもみんな嬉しそうに聞き、餃子が優勝した時には一緒に喜んでいった。読後は絵の細かい部分まで楽しむ子どもが何人もいた。

新刊図書を中心に実践を載せたが、読み聞かせをした絵本の中で子どもたちの反応の良かったものを下記に挙げる。

『こねてのぼして』 『おおかみだあ』  
『うえきばちです』 『まるくておいしいよ』  
『ぜったいにおしちゃダメ？』 『100』  
『うんちっち』 『とんねるとんねる』  
『なにからできているでしょーか？』  
『とんでもない』 『りゆうがあります』  
『いいからいいから』 『まてまてー』  
『おしくら・まんじゅう』  
『ばけばけばけばけばけたくん』  
『かえるくんきをつけて』 『かける』  
『とんことり』 『いちにちむかしばなし』  
『パンダオリンピックたいそう』  
『りんごだんだん』 『おかあさんのパンツ』  
『中をそうぞうしてみよ』 『これだれの』

#### 4 おわりに

コロナ禍でソーシャルディスタンスを保つての読み聞かせは、はっきりと大きな絵が描いてある絵本を選ばないといけないと思いついてきたが、子どもたちの反応や様子を見ることで、細かい絵のある絵本は読後に手に取ってみたいという利点があることが分かった。読み聞かせ中、子どもたちは絵をよく見たり教師の言葉をよく聞いたりすることで教師と心をつなげたり、友達との一体感を感じることで子ども同士で心をつなげたりすることができていた。それだけではなく、読後は新たな発見を教師に伝えることで教師と心をつなげたり、感想を言い合うことで子ども同士で心をつなげたりすることができていた。また、読み聞かせをした絵本を何度も読む子どもや同じシリーズや作家さんの絵本を探す子どもの姿も見られ、絵本と子どもをつながりも感じることもできた。読み聞かせによってクラスがまとまることを改めて実感することができた。

## 心をつなぐ絵本 ～命と向きあう絵本～

倉敷市立庄中学校 教諭 難波 真

### 1 はじめに

私は現在、倉敷市内の総合病院の中にある「院内学級」（正式名称は病弱・身体虚弱特別支援学級）を担当している。「病気が治ってから勉強すればいいじゃないか。」「入院中に学校？」という声も時々聞こえるが、病気で入院している子どもたちの学びを保障することは、学校に通っている子どもと同じく大切なことであると強く感じている。今まで多くの生徒と出会ってきたが、初めて院内学級担任となった年に受け持った中3女子の言葉は、今でも忘れることができない。彼女は朝、目が覚めたら胸に手を当てて心臓が動いていれば感謝するのを日課としていると言うのだ。私は今まで、ただの一度も自分の心臓の鼓動に感謝したことはなかった。

「命は大切」であることを学校で生徒に伝えてきたつもりではいたけれど、今一度このような状況下で命と向きあうことの大切さを、絵本を通して伝えていきたいと思った。

### 2 絵本の紹介

「命」をテーマとしたブックトーク（中学生向け）に選んだ絵本

#### ◎ 導入に

『ええところ』

出版社：学研教育出版  
作・くすのきしげのり  
絵・ふるしょうようこ

自分にはひとつも「ええところ」がないと思っていたあいちゃんが、「ええところ」を見つけてくれた友達や他のみんなの「ええところ」をいっぱい見つけていく絵本。

命は大切だと思うためには、まず自分を大切に思えるようになることが必要だと思う。そして自分以外の誰かの命も等しく大切なも

のだと認識し、この絵本のようにお互いのよいところを伝え合って、教室の空気を温めていく雰囲気作りをする。

#### ◎ 命とは

『いのちのおはなし』

出版社：講談社  
文・日野原重明  
絵・村上康成

2017年に105歳で天寿を全うした医師の日野原重明さんが、10歳の子どもたちに行った「いのち」の授業を再現した絵本。

「自分のもっている自分の時間。それが自分のいのち」というメッセージにはっとさせられる。

#### ◎ 死ぬとはどういうことか

『かないくん』

出版社：東京糸井重里事務所  
作・谷川俊太郎  
絵・松本大洋

特に親しいわけでもない級友の死。悲しみとは違う喪失感。死ぬってどういうことなのか、と考え始める年頃に読み聞かせたい絵本。

1日でこの文章を綴ったという谷川さんと、2年を費やして描いた松本さんの絵が心に迫ってくる。

『ぼく、こわかったんだ』

出版社：BL出版  
作・絵 横須賀香

ぼくは死んだらどうなるの？誰もが一度は想像するであろう「死ぬ」とはどういうことか。そしてその恐怖。不安なのはきみだけじゃない、怖くていいんだよと伝えてくれる絵本。

◎ 死を受け容れる

『でも、わたし生きていくわ』

出版社：文溪堂

作・コレット・ニース＝マズール

絵・エステル・メーンズ

訳・柳田邦

7歳の少女ネリーは両親の突然の事故死で兄弟と離れて暮らすことになる。しかし、まわりのサポートや温かな人とのつながりでネリーは楽しく暮らしていく。「悲しみは消えないけれど、いま、わたしは、しあわせ。」というネリーの言葉には、前向きに生きる力が溢れていて感動する絵本。

◎ 命はつながる

『いのちの木』

出版社：ポプラ

作・絵・ブリッタ・テッケントラップ

訳・森山 京

年老いて静かに死んでいったキツネ。優しくかったキツネの思い出を、森の仲間だった動物たちが語るたびに、キツネのいた場所からオレンジ色の木の芽が顔を出し、やがて大きな木へと育っていく。

誰にでも死は訪れるけれど、思い出が永遠の別れの悲しみを優しく包んでくれることを教えてくれる絵本。

◎ 病気を抱える子どもたち

『ぼくのいのち』

出版社：岩崎書店

作・細谷亮太

絵・永井泰子

田舎の蔵で見つけた写真から、自分が小さい頃白血病だったことを知ったぼく。ぼくは治って元気になったけれど、一緒に入院していたお友だちの中には亡くなってしまった子もいることをお医者さんから聞いた。その日の帰り道に見た風景を、いつもと違う、とてもきれいと感じるぼく。キャンパス地に描かれた絵が温かい絵本。

院内学級の生徒に向けては配慮のいる内容だが、学校に通えている子どもたちには、病気と闘っている子どもたちがいるという事実や

当たり前の日常が過ごせることへの感謝を絵本を通して感じてほしいと思う。

『チャーリー・ブラウンなぜなんだい？

ーともだちがおもい病気になったときー』

出版社：岩崎書店

作・チャールズ・M・シュルツ

訳・細谷亮太

アメリカ・カリフォルニア州の看護師さんが、スヌーピーの作者であるチャールズ・M・シュルツ氏に「ガンと闘っている幼い子どもたちのために、スヌーピーとその仲間の力を貸してほしい」という手紙を出したのがきっかけで出来上がった絵本。白血病で入院したジャニスを巡って世間が作る壁、親や病気の子ども自身が作ってしまう壁、いろいろな病気の子どもたちを悩ませている障壁を取り除くにはどうすればいいかスヌーピーの仲間になったつもりで考えてほしい。

3 おわりに

数年前は院内学級に在籍している子どもたちだけでなく、小児科病棟に入院している幼児にも声をかけて行事を兼ねたお楽しみ会を開き、絵本の読み聞かせをさせてもらえた。コロナ禍の中で、今までしていたような絵本の読み聞かせを行うことが、病院では特に難しくなっている。入院中の子どもたちの心を癒やす絵本タイムも、医療用ゴーグルにマスク越しでは楽しさが伝わりにくい。

「はじめに」で触れた中3女子は絵を描くことが好きで、院内学級でも絵本の読み聞かせを楽しみにしてくれていた。院内学級を卒業して数年後にはその生涯の幕を閉じ、遠いところに旅立ってしまった彼女の笑顔は今も私の胸に鮮やかによみがえる。私は生きていることは素晴らしい奇跡の連続であることを彼女から教わった。まだ厳しい状況は続いているが、子どもたちに笑顔を届けることのできる絵本を楽しむ機会を工夫して作っていかねければ、と思っている。

# 指導助言一分科会D

## 『心をつなぐ絵本』

指導助言者 真庭市立中央図書館 前館長 杉浦 俊太郎

新型コロナウイルス感染症の現状をふまえ、誌上での研究発表を決断された実行委員会ならびに発表者である先生方に対し、まず深い敬意をお伝えしたいと思います。学校図書館は常に進化を続けており、最新の研究成果を反映したアップデートが個々の学びの場の質的向上に繋がってゆきます。中止ではなく誌上発表という形をとることで、みなさんの努力の積み重ねを今年も継続することができました。ウィズコロナ時代の新たな研究大会のあり方を提示して下さったことは大変意義深かったと考えます。そして、何よりも未来を担う子どもたちにとっても、かけがえのない成果ではなかったかと思えます。豊かな読書環境に恵まれた真庭市へお越しいただく機会が失われたのは残念でしたが、ぜひ別の機会に真庭市へいらしてくださいませよう、お願い申し上げます。

分科会D「心をつなぐ絵本」は、まさに新型コロナウイルス感染症と人類が向き合う中で大切な、心と心をつなぐを研究テーマに据えた、「今」を強く意識したタイムリーな発表であったと思えます。子どもたちだけでなく大人たちも新型コロナ禍でリアルに触れ合う場を失っている中で、そうした状況を嘆くのではなく、そうした状況だからこそ出来る読み聞かせを実践された岡山市立豊小学校の酒本薫先生の研究、またコロナ禍によって大切な人々を次々に失った私たちが改めて感じている「いのちと向き合う大切さ」を伝える実践をされた倉敷市立庄中学校の難波真先生の研究は、どちらも読みごたえのある興味深い内容でした。

酒本先生はまず、参加型絵本の意義を「コロナ禍で触れ合えない状況でも絵本を通して友達と関わっている感覚がもてる」と捉えるとともに、子どもたちが好きな繰り返し絵本の読み聞かせを通して「子どもと子ども」「子どもと教師」それぞれの心をつないでいくことに注力されました。

先生が担任されている1年生の学級は、コロナ禍で学校が休校となり学校生活に慣れる時間や授業時間が十分に取れず、図書時間も密になる懸念があったため貸し借りのみ、読み聞かせの時間も十分取れなかったとのことでした。しかし、そうした状況を前向きにとらえ、具体的な実践を行われた点に強く共感致しました。教師の周りに子どもたちを集めなければ読み聞かせができない、というこれまでの常識を見直し、教室の中で自席に座ったままで読み聞かせを行う新たな試みに活路を見出したことが、今回の意義ある研究成果につながったと思えます。読み聞かせ後に絵本を回し読みさせたり、自分の好きなときにその絵本を手にとって読めるようにされたりしたことで、子どもたちが自分の意思で絵本の世界を体験できる環境整備をされたことも、読み聞かせ後の自主的な読み返しを促す取り組みとして、有効だったのではないかと感じました。

もう一点、酒本先生ご自身が気づきとして報告されている「コロナ禍でソーシャルディスタンスを保つための読み聞かせは、はっきりと大きな絵が描いてある絵本を選ばなければいけないと思い込んでいた」というバイアスが、実践活動を通じ子どもたちの反応をリアルに観察したことで消え、むしろ「細かい絵のある絵本は読後に手に取ってみたいくなる利点がある」との発見につながりました。先入観や思い込みで結果を決めつけず、柔軟かつフラットな姿勢で子どもたちと向き合われた酒本先生の取り組みを通じ、私も多くの気づきをいただきました。酒本先生、ありがとうございました。

次に難波先生は、倉敷市内の総合病院の中にある院内学級で、日々病気の子どもの学びを保障する大切な役割を担っていらっしゃいます。私自身、長期の入院や療養によって学びの機会を失

ってしまった子どもたちを支援している某非営利活動法人の活動を応援していることもあり、思いを重ねながら難波先生の研究報告を拝読しました。難波先生がレポート冒頭で書かれています、初めて院内学級を担当された年に受け持った生徒の「朝、目覚めたら胸に手を当てて心臓が動いていれば感謝するのを日課としている」との言葉が重く響きました。コロナ禍という状況下だからこそ、改めていのちと向き合う大切さについて絵本を通して伝えたい、という難波先生の思いに強く共感いたしました。

病気を抱える子どもたちへの支援は、主に院内学級を中心とした入院中の支援にはじまり、退院後の自宅療養時の双方向ウェブ学習、さまざまな体験学習や友達と再会できる場づくり、復学に向けた学習支援など段階を踏んでゆきますが、院内学級での支援はすべての基礎となる大切な取り組みです。退院や自宅療養の叶わない重篤な病状の子どもたちも多いことから、難波先生のご苦勞は大変なものかと推察します。

今回難波先生が選ばれた絵本は、一つひとつが重いテーマであり、コメントしたいことが沢山あるのですが、とても大切だと感じたのは「院内学級の生徒に向けては配慮のいる内容だが、学校に通えている子どもたちには、病気と闘っている子どもたちがいるという事実や当たり前の日常が過ごせることへの感謝を絵本を通じて感じてほしいと思う」と書かれたことです。

さまざまな多様性を尊重する教育が広がってきていますが、最も重要な「他者への想像力」を豊かにする教育の重要性が増す中で、こうした絵本を通じたアプローチが広がって欲しいと思いました。難波先生、ありがとうございました。

## 大会役員

会長	倉敷南高等学校	校長	鳥越 信行	県SLA 会長	高教研学校図書館部会 会長
副会長	岡南小学校	校長	森 淳	県SLA 副会長	小教研情報教育部会 学校図書館部 会長
	操南中学校	校長	青木 伸晃	県SLA 副会長	中教研学校図書館部会 会長
代表理事	津山高等学校	校長	赤松 一樹	県SLA 津山ブロック 代表理事	高教研学校図書館部会 美作地区 会長
	岡山市立西小学校	学校司書	大橋 昭子	県SLA司書部会 会長	

## 大会実行委員会

委員長	津山高等学校	校長	赤松 一樹	県SLA 津山ブロック 代表理事	高教研学校図書館部会 美作地区 会長
副委員長	八束小学校	校長	山本 信子	県SLA津山ブロック 小学校代表理事	小教研情報（図書館）部会 美作地区 会長
	蒜山中学校	校長	廣瀬 正明	県SLA津山ブロック 中学校代表理事	中教研学校図書館部会 美作地区 会長
	成名小学校	校長	池上 敏子	県SLA津山ブロック 各支部会長	
	富小学校	校長	影山 典子		
	誕生寺小学校	校長	西村 恭子		
	東栗倉小学校	校長	宗森 雄子		
勝央北小学校	校長	宮川 美香			
委員	久米中学校	校長	頼経 英博	県SLA津山ブロック 各支部副会長	
	鏡野中学校	校長	筒塩 操		
	中央中学校	校長	有元 満治		
	勝山中学校	校長	近藤美沙子		
	作東中学校	校長	忠政 勇之		
勝央中学校	校長	竹内 由明			
総務部	勝田小学校	校長	服部 克彦	R1県SLA津山ブロック 小学校代表理事	
	美咲中央小学校	校長	唐木 美穂	R2県SLA津山ブロック 小学校代表理事	
研究部	東栗倉小学校	校長	宗森 雄子	美作・西栗倉支部会長	
	作東中学校	校長	忠政 勇之	美作・西栗倉支部副会長	
会場部	八束小学校	校長	山本 信子	真庭支部会長	
	勝山中学校	校長	近藤美沙子	真庭支部副会長	
	成名小学校	校長	池上 敏子	津山支部会長	
	久米中学校	校長	頼経 英博	津山支部副会長	
	富小学校	校長	影山 典子	苫田支部会長	
	鏡野中学校	校長	筒塩 操	苫田支部副会長	
	誕生寺小学校	校長	西村 恭子	久米支部会長	
	中央中学校	校長	有元 満治	久米支部副会長	
	勝央北小学校	校長	宮川 美香	勝田支部会長	
勝央中学校	校長	竹内 由明	勝田支部副会長		

## 県SLA事務局

事務局	岡南小学校	教諭	早川夕加里	小教研 事務局長
	牧石小学校	教諭	武田 綾子	小教研 事務局長
	高松中学校	教諭	池田 麻子	中教研 事務局長
	中山中学校	教諭	湯浅 憲一	中教研 事務局長補佐
	倉敷南高等学校	教諭	平松 玲子	県SLA 事務局長
	倉敷南高等学校	教諭	高橋 綾美	高教研 事務局長
	倉敷南高等学校	学校司書	大西 結美	県SLA 事務局員